8/21(日) 鎮魂の灯１万本

かほく市民川柳祭

第４回鶴彬かほく市民川柳 入選作品発表・表彰・朗詠

中町会館　午後３：15～４：00

一般の部「いのち」小中学生の部「願い」をテーマにしたかほく市民の力作川柳。入選作品は全てフェスティバル会場で、鶴彬の句とともに行灯で展示

》》》》》》》 アトラクション 《《《《《《《 増田康記 ピペファートコンサート

中町会館　午後４：00～５：30
浄 専 寺　午後７：30～

平和のメッセージを携えて、日本国内だけでなく東南アジアへも活動範囲を広げている増田康記のコンサートをお楽しみください。

●◎ 万 燈 会 ◎●

額神社境内　午後５：30～９：00

平和を願い命を落とした鶴彬や戦没者たちに思いをはせ、１万個の灯を灯します。

写真展・鶴彬絵本原画展

たかまつ まちかど交流館　8/18(木)～26(金)
午前10：00～午後５：00(火曜定休)

第21回 鶴彬川柳大賞発表

高松産業文化センター　8/28(日)午後１：00～

第17回 鶴彬をたたえる碑前祭

高松歴史公園　9/14（水）午後２：00～

上映会「南京事件　兵士たちの遺言」２：45～

第５回 高松歴史街道フェスタ

鶴彬のふる里・高松の街並から未来へ

戦争法を許すな
多くの人々が
立ち上がり始めた。
命がけで平和を求めた
鶴彬の　あの時代を
くり返さないために

鶴彬通信
はばたき

第25号
2016年８月１日
鶴彬を顕彰する会

もくじ

②～⑤面　本田一三一講師の第２回川柳講座
⑥～⑧面　濱本燿子講師の第３回川柳講座
⑫～㉖面　宇部功先生の特別授業と児童の感想文
㉗～㉛面　戦争を考える・学童集団疎開と終戦

第2回 川柳講座

川柳文化の向上に尽力を

折戸・市生涯学習課長が挨拶

鶴彬を顕彰する会主催の第２回川柳講座は、５月14日に開かれ、38人が参加しました。講座の前に、折戸靖幸かほく市生涯学習課長が挨拶、次のように述べられました。

挨拶する折戸かほく市生涯学習課長

鶴彬を顕彰する会主催によるこの講座が石川県川柳協会や関係者の皆様の後援を得て盛大に開催されていることをお喜び申し上げます。

川柳人鶴彬についての私の認識は、戦後50年の節目を迎えた頃からあらためて光が当てられ、全国的に評価されるようになったと思っております。そういう中で高松川柳会を中心にずっと鶴彬忌川柳大会を開催したり、全国公募の鶴彬川柳大賞の事業に取り組んでおりました。その中で横井幹雄（勘童）さんや橋爪宏（無声子）さんという、大会を牽引されていた方々が亡くなられたのは、時の流れとはいえ残念に思っております。

そういう中で今度は高松川柳会、七塚川柳会、鶴彬を顕彰する会の皆様が手と手を取り合って、引き続き鶴彬の顕彰と川柳文化の継承にご尽力を頂いているものと理解しております。今後、皆様におかれましてはこの講座を通じて川柳に親しんで頂きますとともに、引き続き川柳文化の向上にご尽力頂ければ有難いと思っています。

かほく市といたしましては、このような活動に対して市の補助金とか県の文化振興の補助金をもって助成をさせて頂いたところでありますけれども、何よりも皆様の地道な活動というものが大切になってくると思いますので、今後ともよろしくお願いいたします。

最後に、今日集まりの皆様、関係各位の益々の発展と、ご多幸、ご活躍を御祈念申し上げまして、簡単ではありますがご挨拶とさせて頂きます。

いろいろな角度から川柳について語る本田一三一氏

続いて長谷会長より挨拶があり「折戸課長が来られ、鶴彬を顕彰する活動が市にも認知されたと証明されました。課長の言葉にもありましたように、地道に鶴彬を顕彰する活動を通しながら、皆様と一緒に川柳を学んでいきたいと思います」と述べました。

講師 本田一三一氏

（石川県川柳協会副会長）

「川柳いろいろ、川柳の鑑賞方法」

まず「一三一」という名前について。私は昭和十三年一月生まれ。私には兄がたくさんいて、私は最後の方だったので父は面倒くさかったのだろう。読み方は一三一で「ヒサカズ」と読む。

私は県川柳協会の副会長の他、番傘常任幹事や松任川柳会会長、北國新聞の芸術文化協会評議員などをし、鶴彬忌川柳大会には毎年参加させて頂いている。鶴彬忌大会では90人以上の参加者の献句があり、句と名前を間違えないように読み上げるのに苦労する。

私の生まれは鳥越村（現白山市）。高校卒業後、村の教育委員会の仕事をした後、金沢に

出て繊維関係の仕事をしていた。かほく市も繊維が盛んだが、当時就職した頃は繊維の花盛りで、私は染め上がった品物を国外、海外に仕出す仕事をしていた。だが繊維産業も落ち目になって、最後にはいろんな目に遭った。親とは早くに死別したが、親には元気な体を頂き、学校を一日も休まなかったのが自慢で、今も元気で毎日過ごせることに感謝している。

「蟹の目」「番傘」の違いは…

さて本題。前回の福村今日志会長の講座の復習も兼ねてお話ししたい。川柳と俳句の違いは、俳句は季語が入るが、川柳は自由に作ればよく、形にとらわれないのが川柳の面白さ。だからといって人の悪口や欠点を詠むことはできない。川柳にはいろいろあり、全日本川柳協会や福村会長の蟹の目川柳社、私のいる番傘川柳などがある。番傘川柳の特徴は一読明快で、聞いたら「なるほど」とすぐ分かる句が多い。蟹の目川柳は高級で「どういうことかな」と思ったり、意味を聞いたりすることがある。

福井県は川柳が盛んで、番傘川柳の中心地でもある。鯖江市の番傘川柳会では毎年「つつじまつり川柳大会」が開催され、公園はツツジが満開で、屋台や催しもある。今年の５月８日に私も大会に参加した。題は６題で、一人２句。１２３名の参加者があるので、なかなか入選しない。しかし「積む」という題でたまたま私は入選した。

（佳句）仏門の深くて遠い徳を積む

（秀句）被災者の涙を積んである役所

役所は、頼んでもすぐやってもらえないとか一般的に良いイメージは持たれていないが、この句では役所自体が被害者となって、どうしていいか分からない状態にある。これが秀句に選ばれ、久々に良い気分で帰れた。

感情は上五には入れず、下五は崩さない

川柳は五七五が基本。川柳では喜怒哀楽の感情を詠むが、喜怒哀楽の言葉は上の句で使わず、中七か下五で使う。上五や中七が崩れることがあっても、番傘川柳では最後の下五だけは守ってほしい。下五は体操でいえば着地。番傘川柳では下五が下六になったりすると「下五の座りが悪い」という。蟹の目川柳では五七五でなくとも全体が良ければ認められるが、それなりの内容の川柳が求められている。

鶴彬川柳の「穿ち」は深みがある

川柳の三要素は「穿（うが）ち」「おかしみ」「軽み」。一番難しいのは穿ちで、読む人に「なるほど」「鋭い」と思わせなければならない。

鶴彬の代表句「手と足をもいだ丸太にしてかへし」。これは「穿ち」の句とも解釈できる。この句の解釈は「死んだ」のか「生きている」のか。手と足のない人を返してもらっても困るというのか、死んでしまっては何にもならないというのか。この句は深みのある句で、鶴彬はどう思って詠んだか分からないが、私はこの句から生きているという希望を読み取りたい。

鶴彬はあの若さで大変な思いをしながら立派な句を詠んだ。そのような人はなかなかないが、そういうことを考えながら句を作っていければいいと思う。

喜怒哀楽を別の言葉で表現する

喜怒哀楽と言っても、「嬉しい」とか「悲しい」と言う言葉を使わず、別の言葉で表現する努力が必要。「朝起きて顔を洗って歯を磨く」では説明文になるので、下五で「はっ、なるほど」と思わせることが重要。上五と中七が出来ても、下五をどうするかが難しく、ベテランでも二日も三日も考える人がいる。

川柳を作るには、常にメモに書き留めると良い。朝に詠んだ川柳が一番よい。寝るときも、私はノートと電子辞書を枕元に置いている。寝る前に良い句が思いついて「明日の朝に書けばいいわ」と言って寝てしまい、翌朝全く思い出せないことがよくある。逆に、寝る前に良い句が思い浮かび、それを書き留め、翌朝その句を見たとき「何でこんな変な句を作ったんだ」ということもある。句は思いついてもすぐ忘れるので、気が付いたときにメモをするのが大事。句を後から直すのは簡単で、直したら入選したということもある。

川柳が初めての人で、私の話が難しいと思った人は、サラリーマン川柳（以下サラ川）みたいな句から入って、徐々に川柳の奥に入っていくのも良い。サラ川の三要素は、妻の悪口、旦那の悪口、会社や上司の悪口である。

（ここで本田さんは、平成23～26年のＮＨＫ学園川柳大会の大賞、特別賞の全56句を１句ずつ解説しました。その中から質問や意見、感想のあった句を中心に、６句を紹介します。）

若いねと言われて引き算してしまう

これは、さらっとした句。女性が「若いね」と言われると嬉しくなり、実際の歳より少なめに年を言う。

（会場男性） 私はこれとは反対の立場。「若いね」と言われたら逆に足し算してしまう。

（本田さん） これは女性が詠んだもの。いろんな考え方がある。

獅子舞もバイトの足にたよる過疎

能登はキリコ祭りが有名だが、在所の人では人数がそろわない。近年は在所から出て行った人や大学生を雇って祭りをしているところもある。

（会場男性） これは私が最も共感した句。ＮＨＫがよくこれを選んだものだと感心した。

（福村さん） これはＮＨＫが選んだのでなく大会の選者が選んだもの。

（本田さん） 私は選者ではないので何とも言えないが、その時の選者の好みがあるし、選者が過疎地に住んでいて共感したとも考えられる。一昨年までこのＮＨＫの大会は根上（石川県能美市）で行われていたが、市から予算が削られ運営が厳しくなり、ＮＨＫが根上から引き上げたのは残念だ。

遠ざかる昭和近づく昭和初期

これは難しい句。昭和がだんだん遠くなるが、また戻るのではないかという憶測。

（会場男性） 私はこの句から、鶴彬の句「塹ごうで詠む妹を売る手紙」を連想した。役場に娘身売り相談所があった昭和初期。戦争が近づいて来ている嫌な感じの昭和初期。そんな時代に平成の今、近づいていると私は解釈した。

（本田さん） 嫌な昭和が終わり、また戦争になるんじゃないかと先を詠んだ句とも解釈できる。句の本質は作者に聞いてみないと分からない。そのような意見が出るということは深みがある句だということ。

内戦が続いて鳩が逃げまどう

中東や欧州では毎日のようにテロがあり気の毒だが、これは外国の話に限らない。鳩は弱く優しく大人しい鳥。鳩は人間を指す。戦争になれば、弱い人間、女性、子どもたちが逃げ惑う。

（福村さん） 「鳩は『平和』じゃないかな」

母さんが帰りたかった自宅だよ

病院に入院していた母親が、薬効空しく亡くなって家に帰ってきた。家族が母親の亡骸にそう声をかけたという悲しい場面を想像する。素晴らしい句である。

千羽目の次一羽目の鶴を折る

普通は千羽で作り終わり、それを捧げる。しかし、この人は捧げた後に次の千羽を折ろうとする。こんな気持ちになれる人は立派である。

（会場男性） この句が作られたのは平成23年。この年に何か起こったのではないか。

（会場女性） 東日本大震災が起こった年。

（会場女性） この句を作った人は長崎県の人。

（福村さん） 川柳の解釈に一致するものはない。「こういう見方もあるのかな」というのが川柳の文芸性。川柳の作者と鑑賞者が一致するのは説明文だけ。

（会場女性） 東日本大震災で亡くなったり家が壊れたりした方が多いので、祈りの深さを表した句だと解釈したが、作者が長崎の方だと知り、それぞれの人にそれぞれの思いがあると受け取ればいいのかなと思った。

（会場女性） 平成23年、私の息子が悪性の癌の闘病中で、医師から余命はないと告げられた。私は夜中２時３時にお手洗いで起きたときも病院に向かって祈っていた。このときの私の気持ちを句にすると、まさにこの句と重なる。この句を読んだとき、胸が熱くなった。私の場合は震災とも戦争とも関係ないが、個人の心の中にも重なるものがある。

（本田さんが川柳を始めたきっかけについて質問してみました）

私が川柳を始めたきっかけは、「一三一」というユーモアのある名前をつけた父と同じように、私もユーモアが好きで、北國新聞夕刊に載っていた川柳が面白いと思った。当時、山田良行という有名な人が選者をしていた。私も投句し入選した。それが嬉しかったことが川柳を始めたきっかけだった。最初は川柳を読んで「面白いな」「自分でもできそうだな」と思って始めた。「難しいな」と思って始める人はいないと思う。

（ユーモアといえば、サラ川。本田さんはサラ川をどう評価しているかを質問してみまし

た）

川柳とサラ川との明確な線引きはないが、例えばサラ川にこういうのがある。

ミスのミス　ミセスのミスと　なぜ違う
無礼講　会社に戻れば　無礼者

最初の句は、若い独身女性のミスは上司から許され、年配の女性のミスは叱られる。次の句は、宴会で「無礼講」といわれながら、翌日上司に叱られる。

（**福村さん**）これは川柳でなく、言葉遊び。

入社時に　作った名刺が　まだ使え
遠吠えの　癖はやっぱり　僕の犬
マイホーム　手の出る所は　熊も出る
運動会　抜くなその子は　課長の子
松茸は　おいしくないよと　子に教え

（本田さんがサラ川を詠みあげるごとに会場は笑いに包まれました）

サラ川から川柳を始められてもよいが、サラ川は笑ってすぐ終わる。そういうものよりもＮＨＫの川柳「母さんが帰りたかった自宅だよ」の句。心にジーンとくるものがある。

（以上講演要旨。文責・寺内徹乗）

山田良行のユーモア川柳

鶴彬を顕彰する会　寺内　徹乗

本田一三一さんが川柳を始めるきっかけとなった山田良行とはどんな人物でしょうか。本名は「よしゆき」柳名は「りょうこう」。大正11年、旧満州国（中国遼寧省営口市）生まれ。本籍は金沢市。ハルビン医大卒。医学博士。奉天医大での勤務医時代、結核患者の一人が川柳を嗜んでいたのを見て、俳句より奥が深く面白いと思い川柳を始めた。

戦後、金沢市民病院結核病棟で勤務するかたわら、患者にすこしでも明るい笑いをと思い立ち、病院内で川柳会を始めた。また、川柳六大家の一人で番傘の岸本水府や福井番傘の川崎銀甲の指導を受け、昭和30年、番傘の同人となり柳誌「えんぴつ」を創刊。昭和31年金沢番傘川柳社を創設。昭和44年、番傘から独立し北國（きたぐに）川柳社を創設。柳誌「きたぐに」創刊。全日本川柳協会理事長などを歴任した他、週刊ポストや北國新聞などの選者もした。平成11年、脳梗塞により76歳で死去した。

良行の川柳の特徴は「患者に笑いを」の初心に貫かれ、鶴彬の川柳とは違った軽妙なユーモア風刺が特徴である。くすっと笑える句からジーンとくる句まで、良行の作品を紹介したい。

謝った後で電話は舌を出し
アンケートその後どうしたのか知らず
良い表紙ですねと内容には触れず
医者に診てもらえと相談欄の医者
一流でないから名刺持っている
奥さんによろしく言うだけ聞いただけ
お婆さんに切られかかった桃太郎
外人に聞かれて逃げる日本人
買う人がおれば売ります非売品
片方の耳しか聞いてない電話
神様の手には入らぬお賽銭
金髪のこちらを向けば日本人
欠席の理由本当は金が無し
原発へ玉虫色でいる教授
ささやかな抵抗ハイを二つ言う
市を捨てて名誉市民に迎えられ
姉妹都市どちらが姉かまで決めず
事務室の紅一点をこき使い
正直に粗品とかいてある粗品
白バイの後ろを走るおとなしさ
千羽鶴鶴の目刺しという姿
黙らせておいて黙ったのが不満
所によって降ると予想も無責任
年寄りに荷物運ばすクリスマス
肉食って動物愛護など言うな
花束よりお金がほしいとも言えず
ああ男臭いと女窓をあけ
よっぽどのピンチごきぶり飛び上がり
愛相のいい子に注射打ちにくし
搾取する見本を鵜飼見せてくれ
ペット屋の檻でペットの寂しい目
人間に国境という檻があり
両軍に祈られ神様返事せず
いつ死ぬか誰も知らないから楽し
過失致死の前科も秘めた聴診器
余生とはもう止みそうなオルゴール
疲れたと言わぬお日様お月様

（群馬県太田市・太田金山にある句碑）

参考文献
『石川近代文学全集19　近代川柳』
『川柳の群像』東野大八著・田辺聖子監修

第3回 川柳講座

第３回川柳講座は６月11日に開かれ、40名の参加がありました。

講師　濱本　燿子氏
（石川県川柳協会副会長）

「女性川柳作家から学ぶ」

川柳の歴史をたどると、江戸時代の後期に活躍した前付句（まえつけく）の点者、柄井川柳（からいせんりゅう）の選句が川柳風と呼ばれ当時の人にもてはやされた。

（前句）きりたくもあり切りたくもなし
（付句）ぬすっ人をとらえて見れば我子なり

（前句）にぎやかなことにぎやかなこと
（付句）ふる雪の白きを見せぬ日本橋

その付句が独立して川柳になった。

かみなりをまねて腹がけやっとさせ
ひん抜いた大根で道を教えられ
女房と相談をして義理を欠き

明治になり狂句の時代が続いたが、明治30年代になると、阪井久良岐（さかいくらき）が登場し新しい川柳の時代になり、明治40年代には文芸としての川柳が認知され、このとき川柳という名称が使われるようになり、大正時代になると井上剣花坊や田中五呂八などが活躍した。

女性の川柳作家には井上信子が知られ、夫・剣花坊と夫婦で川柳を詠み合っていたのだと思う。

国境を知らぬ草の実こぼれ合い　信子
一人去り二人去り仏と二人　信子

女性川柳作家を取り上げて語る濱本燿子氏

他に同時代の女性作家として、三笠しづ子が有名である。ただ私は、「男性らしさの句、女性らしさの句」という言い方は好きではない。男性だからこういう句を詠まなければならない、女性だからこういう句を詠まなければならない、ということは一切ない。その人、その人、個人から生まれたものが川柳である。

現代川柳について時実新子は10のポイントを挙げている。

一、「危機感（緊張感）」
ぬるま湯に浸かるのではなく、感度の良いアンテナを持ちつづける。

かくれんぼかえってこないかも知れぬ　夢草

二、「訴求力」
自分の思いを訴え、答えを探していくことが大切。人の借り物ではなく、自分の言葉で、本音の言葉で詠む。

三、「意味性」
具体的に分かりやすく作る。

みちずれのみかんに話すことがあり　新子
木のみかん数え尽くして離婚前　新子

四、「意外性」
おもしろさの一つの条件が意外性。

風車幼児の顔をほころばす　新聞投句

幼児の顔がほころぶ情景が浮かぶ。ただし意外性ばかり追求すると、奇をてらい、昔あった狂句になってしまう。

五、「あそびのこころ」
自分を他人視する。そうすれば、ガチガチではなく、ユーモアやペーソス（哀愁）のある句になる。まじめな人はまじめな句を作りが

ちだが、あそびのこころが川柳には大切である。

六、「一句一姿」

短い五七五の中ですべてを語れるのが理想。

七、「伝統と革新」

伝統を重んじ革新を追求してほしい。

八、「難解句と伝達」

一回読んで、「何を言っているのか？」と思う句によく出会う。それは独りよがりの句に多い。独りよがりに陥ると、展開が少なくなる。自分で作った句を一度突き放し、またそれを見直してみると、どこがおかしいか見えてくる。分かりやすい句は読者の心にも届く。

九、「類想と類句」

偶然、よく似た句ができることがある。盗作だと言われることがあるが、先に発表した方が優位になる。もの真似さえしなければ大丈夫だと思う。皆さまにはそれぞれの個性があるから。

十、「風土性と作家の境涯」

自分の思い、自分の言葉を大切にする。作者の作品から自ずと匂い立つような句がよい。「この句はあの人の作じゃないかしら」という風になれば、すごいと思う。

「こころの川柳」を紡いで、やがては自分史にしてほしいと思う。そのためには、もう一人のあなたが必要である。そのあなたをしっかり捉えて書くもう一人のあなたの存在が大切だと思う。それが、皆さまの川柳になる。それが積まれるとあなたの個性になる。すなわち、あなたの宝である。

質疑応答

（会場男性） 私は句会で選をすることがあるが、女性の句は正直だと思う。

（濱本さん） 女性の方が開き直りや、率直さがあると思う。「嬉しい」と感じたら嬉しい句を作る。男性の句は肩に力が入っているんじゃないかなと思う。

（本田さん） 男性の句は大ざっぱで、女性の句は緻密で繊細な感じがする。だから男性も女性の句が好きなのではないか。

（福村さん） 時実新子さんは女性という立場で、性やエロチックをどこまでやれるかということを追求した人である。そういう意味では新子さんは率直で大胆な人だった。

（濱本さん） 男性は「男だからしっかりしろ」と肩肘を張って育てられた方が多い。しかし、川柳は男だから、女だからではなく、人として詠んで頂きたいと思う。

（会場男性） 男性の句、女性の句ではなく人間の句として、男女を分ける必要はないとのことだが、やはり情念句、感覚句については女性には身についたものがあり、自分では作れないと思うことがある。

（濱本さん） 神様が男性と女性分けて作って下さったのだから、そのように感じられる面もあるかもしれないが、その人、その人が感じた思いを川柳に出せばいいと思う。

（会場男性） 男性は仕事のことばかり話し、漢字が多い。女性は家族のことを話し、分かりやすい。それが川柳にも反映されるのではないか。

（濱本さん） 自然に出てくるものは大事だと思う。男らしさや、女らしさではなく、その人らしさとして。

（会場女性） 今は男女雇用機会均等法があるように、男性が台所に入ることはおかしいことではなく、女性がキャリアウーマンになることもおかしいことではないと思う。どんどん男と女の世界が混ざってきて、人と人との川柳が継承されていくのではないかという期待を私は持っている。

（濱本さん） その通りです。その人、その人の川柳だと思う。だから私は一人一人が一生懸命作った句に秀句とか佳句とか没にするのは、あまり好きではない。その人が一生懸命作った句なら、みんなすごい句だと思う。

（濱本さんは「川上三太郎単語」を紹介しました）

私の句の旅は　帰りの切符がない
無残な旅ではあるが――　（昭和30年）

ただひとすぢに　生きぬくと
ひとは　孤独になる
私の場合　川柳　即　孤独である（昭和31年）

この道は　七転のみにて　八起なし
這う　這う　這う　ただ這うのみ（昭和36年）

川上三太郎60歳～70歳にかけての言葉である。三太郎はそういう思いで作句したのだと思う。

（濱本さんは、代表的な女性作家15人20句を

紹介しました）

秀才の静かに甘いものが好き　森中恵美子
母はまだ一人でまたぐ水を足す　森中恵美子
子を産まぬ約束で逢う雪しきり　森中恵美子

（**会場女性**）どういう意味か。

（**濱本さん**）今でいう不倫の相手を詠んだものだと思う。だから子どもは産めない。二人が会った日、雪はしきりに降っていた。

寒菊の忍耐という汚らし　時実　新子

（**会場女性**）私はこの句が一番好きだ。咲き誇っていた菊がどんどん色あせていく。それは寒さに耐えかねて枯れてしまうけれど、菊でありつづけようとする姿を「汚らし」という言葉で表している。女性の緻密な感情が現れている。

（**会場男性**）女の執念を詠んだものか。

（**濱本さん**）霜の降った寒菊を汚らしいと見るか忍耐強いとみるか。それはみなさんの自由。

妻が死んだ男さらさら興味なし　時実　新子

（**会場男性**）妻を亡くした男は、妻のことをあっさりと忘れるという意味か。

（**会場女性**）男性は妻を亡くすと、亡くなった妻のことばかり思うものだ。

（**会場男性**）私もそう思う。妻と不仲で、不倫をしていた男性は、そう思わないかもしれない。

（**福村さん**）この句は不倫ではない。新子さんは私の家に二度泊まって行ったことがある。この句の意味は新子さんの気性を知らなければ分からない。新子さんは恋多き人だった。

（**会場男性**）「興味なし」の主語は男ではなく新子さんであることが理解できた。新子さんは妻を亡くした男には興味はないと解釈できた。

（**本田さん**）私は妻を亡くしている。新子さんは亡くなった妻のことをいつまでもめめしく言っているような男には興味がないと解釈した。

（**福村さん**）作品というものは、作者と選者の思いはなかなか一致しないもの。「こういう読み方もあるな、ああいう読み方もあるな」という作品の幅があることを頭に入れてほしい。

（**濱本さん**）「男の人ってこういうふうに思うんだ。女の人はこういうふうに思うんだ」という句もある。そこが川柳の面白いところ。

万歳の声は涙の捨てどころ　井上　信子
飲んでほし止めてもほしい酒をつぎ　麻生　葭乃
ペン持てば内向性の人でなし　薮内千代子
満点の星です嘘はいいません　薮内千代子

国道を無事に渡って来た毛虫　高橋智万子

（**会場男性**）「毛虫」ではなく「カルガモ」では川柳にならないのか。

（**濱本さん**）川柳になるが、字余りになる。カルガモを上五に持っていき「カルガモが国道無事に渡り終え」と詠んだらどうか。この句は毛虫がもにょもにょと力強く渡る姿がよい。

混浴と知って慌てたのが男　林　照子
愛さめた二人幹事に指名され　東條サチコ
雪ん子になって水子よおりてこい　長谷川博子
ローンの家からコアラを見に行く　星　枝子
昔むかし赤紙という人さらい　稲野　豊江
はずみ過ぎた毬だと思う恥ずかしさ　佐伯みどり
パン食にごはんですよと家族呼ぶ　井上　英子
いいかあちゃんと酔ったときだけほめられる　伊勢　久子

「とにかく川柳を詠んでみて下さい。作ってみて下さい。そうすれば川柳が楽しくなり洗練されていきますから」と語る濱本さん。最後に「暑い」という題で句を作り、受講者の句が披露されました。

（以上講座要旨。文責・寺内徹乗）

鶴彬をとりまく川柳作家たち

鶴彬を顕彰する会　寺内　徹乗

濱本燿子さんの講座では川柳の歴史について触れられました。その中で登場した数多くの川柳作家はみな鶴彬（明治42年～昭和13年）と直接または間接的に関わった人たちでした。そこで鶴彬の生涯と川柳の歴史を掘り下げてみます。

■柄井　川柳　一七一八年～一七九〇年

十代将軍・徳川家治の時代、老中・田沼意次が活躍していた時代、一七六二年、川柳は「誹風柳多留（はいふうやなぎだる）」を刊行

し流行させた。明治以降は古川柳（こせんりゅう）と呼ばれるようになる。柄井川柳自身は点者に徹し、川柳は残しておらず、時世の句「木枯らしや跡で芽をふけ川柳」のみが伝わる。鶴彬は古川柳を研究し、その中に上部階級と現実への批判や風刺があることを評価した。

役人の子はニギニギをよくおぼえ　古川柳
禅宗は座禅がすむと蚤をとり　古川柳
売った日を命日よりもさびしがり　古川柳

■阪井久良岐　明治2（一八七二）年～昭和20年

神奈川県横浜市生まれ。高等師範学校国文科の学生の頃から漢詩や和歌を嗜んでいた。『報知』の記者を経て、明治30年、新聞『日本』に入社。俳句の革新運動を始めた正岡子規（慶應3・一八六八年～明治35年）は同社の先輩だった。明治36年、久良岐は『日本』の川柳の選者になったが、同年、井上剣花坊が『日本』に入社し新川柳の選者になったため退職した。その後は『電報新聞』の川柳選者に採用され、柳誌『五月鯉』創刊し、明治40年に廃刊した。

近代川柳は岐門、剣門の二派の対立から始まった。久良岐が川柳に没頭するようになったのは剣花坊の出現にあったとされ、二人は犬猿の仲であったという。鶴彬は『蒼空』（昭和11年）の中で、江戸文化の通や粋に重点を置いていた久良岐を「生きながらにして博物館行きを志願する老いたる一人の川柳作家」とこき下した。

久良岐の門下には、後に川柳六大家の一人となる前田雀郎がいた。雀郎は俳句にも興じ「川柳と俳諧の特徴は、俳壇の平句を実践するのが川柳である」と語っている。雀郎の門下の尾藤三柳氏（昭和4年～）は昭和51年「川柳公論」を主宰し、息子の尾藤一泉氏（昭和35年～）とともに川柳講座やマスコミ川柳で活躍している。

■井上剣花坊　明治3年～昭和9年

山口県萩市生まれ。尊王思想の人物でもあり、もとは自由民権運動家であった。学問は漢学塾に学ぶ以外は独学で学んだ。剣花坊は『越後日報』の記者を経て、明治36年、新聞『日本』入社。『日本』は政府批判でたびたび発禁処分を受けた新聞であり、主筆・古島一雄（慶應元年・一八六五年～昭和27年）は、発禁を防ぎながら政府批判をするために川柳を利用しようと思い立ち、子規や久良岐らにやらせたが成功しなかった。古島は、たまたま剣花坊の詠んだ時事句（狂句という説も）を見つけ、剣花坊に川柳研究を命じ、これが成功し、剣花坊の川柳人生の始まりとなった。なお古島は明治44年に政界に転じ、戦前は犬養毅首相を支え、戦後は鳩山一郎に首相候補に推されるが固辞し、吉田茂首相の指南役となった人物として知られる。

明治37年、剣花坊は柳樽寺川柳会を結成。久良岐の『五月鯉』に対抗するため、柳誌『川柳』を創刊。大正元年『大正川柳』に改題。昭和元年には『川柳人』に改題した。その間、『国民新聞』『読売新聞』『福岡日日新聞』『中国民報』『主婦之友』など客員で選者を務めた。

昭和2年、剣花坊は『川柳人』に新興川柳を発表し、森田一二（明治25年～昭和54年・石川県金沢市出身）、鶴彬のプロレタリア川柳と田中五呂八の新生命主義の論争が繰り広げられた。また鶴彬はこの年、上京し剣花坊と面会。剣花坊は鶴彬を高く評価し、鶴彬は『川柳人』に句や評論を度々寄稿し、柳壇で名を上げた。

剣花坊の門弟は五呂八、森田一二、鶴彬の他に、後に小説『宮本武蔵』で名をあげた吉川英治（柳名・雉子郎）や、後に川柳六大家と呼ばれる川上三太郎や村田周魚などもいた。昭和9年、神奈川県鎌倉の建長寺で死去。64歳。昭和10年『川柳人』は休刊になる。

■井上　信子　明治2年～昭和33年

山口県萩市生まれ。明治27年、家族の反対を押し切り日清戦争で日赤の看護婦に志願し、明治31年まで看護婦をしていた。明治32年、姻戚関係にあった井上剣花坊と結婚。共に再婚同士で、剣花坊と前妻の間に三男、信子との間には二女が生まれた。明治37年、日露戦争が起こった時には幼い長女を家に残し、再び看護婦として中国遼東半島に約一年半召集された。

柳壇では三笠しづ子らと柳樽寺婦人の会を結成し、女柳作家の育成に乗り出す。

昭和9年、夫の剣花坊死去。鶴彬の協力のもと柳誌『蒼空』を個人誌として創刊。

昭和10年、信子のもとに日本中の名だたる川柳人が集まり「井上信子を励ます会」を開く。またこの時期、信子は職のない鶴彬のため募金活動を呼びかけ、鶴彬は集まった資金で鶉の飼育と卵の販売をして生計を立てた。

昭和12年、『川柳人』を復刊させ、鶴彬がその編集を担っていたが、同年12月、反戦句

を発表したことを理由に信子と鶴彬は逮捕され、信子は拘束を免れたが『川柳人』は発禁となった。信子は昭和13年９月14日に鶴彬が獄死するまで面会を重ね、鶴彬を励ました。

その後も『川柳人』は、中島国夫（明治32年～昭和45年・富山県大沢野村・現富山市出身）の協力により再刊するが何度も発禁になり、昭和18年、戦況悪化で疎開したのを機に休刊した。

『川柳人』は戦後の昭和26年には国夫の協力で再刊、昭和32年、高木夢二郎（明治28年～昭和49年）や信子と剣花坊の次女の大石鶴子（明治40年～平成11年）の協力によって刊行された。昭和33年、信子は88歳で死去。その後『川柳人』は鶴子に引き継がれ、現在は、岩手県で鶴彬の顕彰活動をしている佐藤岳俊氏（昭和20年～）に引き継がれている。

戦死する敵にも親も子もあろう　信子
空襲の上は涼しい星の空　信子
敵味方並ぶベッドの赤十字　信子
女神の偶像ではない看護婦の血は赤い　信子
どのように座りかへても我が姿　信子
草むしり無念無想の地を広め（時世句）　信子

■三笠しづ子　明治15年～昭和７年

生い立ち不詳。弁護士の妻で、才色兼備の女性だったと伝わる。大正12年、井上信子の川柳に魅せられ、川柳を始めた。信子も「当時女性作家といえば、東京にあっては完全に孤軍奮闘の時代であったから、自分の内心の喜びと気強さは非常なものだった」と語ったように、しづ子の柳壇への登場は信子を勇気づけた。剣花坊の『大正川柳』『川柳人』の他、五呂八の『氷原』などで活躍。昭和７年に死去するまでの約８年間の川柳人生の中、数千の句を残した。信子の剣花坊の追悼句「一人去り二人去り仏と二人」は「しづ子去り剣花坊去り仏と二人」だったとも解釈できる。

いくたびか身構へながら引きずられ　しづ子
あまつさえ涙は女の武器などと　しづ子
裏の裏その闇に咲く花があり　しづ子
これ以上人形らしくなり切れず　しづ子
太陽と月の遠さに憧れる　しづ子

■田中五呂八　明治28年～昭和12年

北海道釧路市生まれ。大正10年頃には剣花坊の『大正川柳』で横綱を張り「北海道に五呂八あり」と名声を得るとともに、小樽新聞の川柳選者も務めた。大正11年、突然活動を休止。その間ショーペンハウエルやベルグソン、西田幾多郎などの哲学書を読んでいたらしい。

大正12年、柳誌『氷原』創刊。今までの川柳は「戯作川柳」と宣言し、哲学で理論武装し新生命主義の川柳を発表。プロレタリア川柳の森田一二と論争を始め、鶴彬の知的好奇心を刺激した。五呂八もまた鶴彬の才能を認め、鶴彬も五呂八に師事し『氷原』に寄稿していたが、鶴彬が森田一二のプロレタリア川柳の陣営に加わると、鶴彬を『氷原』からボイコットした。一方、五呂八は地元の小樽で小林多喜二（明治36年～昭和８年）とも顔を突き合わせ、「唯物的マルクス主義」対「唯心的ブルジョア主義」で論争もした。しかし、昭和９年、病気や資金繰りの悪化、文学的行き詰まりなどで『氷原』はたびたび休刊となり、昭和13年廃刊となる。

■川上三太郎　明治24年～昭和43年

東京日本橋生まれ。明治38年、14歳の頃から剣花坊の柳樽寺同人となる。大倉商業学校卒業後、大正元年、大倉洋行に入社し中国の天津で勤務するが、長くは続かず帰国。約８年間の放浪生活を送った。

大正９年、川柳仲間の紹介で『東京毎夕』新聞社に入社。社の後輩に吉川英治（雉子郎）がいた。昭和２年『川柳一万句集』を発行し好評となり、翌年『滑稽句集』を出し、プロの川柳作家となった。昭和４年『国民新聞』の川柳選者。柳誌『国民川柳』（後の『川柳研究』）創刊。剣花坊、久良岐に次ぐ大家といわれたが、支那事変（日中戦争）の対応で、信子や鶴彬と明暗を分けることになった。

昭和12年、『川柳研究』で三太郎は、戦況はますます厳しくなったのだから言動を慎重自戒すべきだと主張。川柳家・森鶏牛子（もりけいぎゅうし・生没年不詳）は、柳誌『三味線草』の中で反戦句を発表した鶴彬と井上信子を「非愛国的」「不感症」「下等動物」などと罵倒し、遂には特高に密告するところとなり、信子と鶴彬は逮捕された（『川柳人』弾圧事件）。これは日本初の短詩文学の言論弾圧となった。

三太郎は「光輝ある『川柳人』よ、どこへ行く」と鶏牛子に語り、これは『三味線草』の告発文にも引用されているが、実際に告発にも協力したといわれる。だが「光輝ある『川柳人』よ、どこへ行く」という三太郎の苦言は、古島一雄と剣花坊との川柳の出発点を考えれば的外れである。むしろ信子と鶴彬

の路線は原点回帰といえるが、この時代多くの人々が戦争の渦に巻き込まれ、それに抗う川柳家は信子、鶴彬、国夫など数えるほどしかおらず、久良岐をはじめ多くの川柳作家は、三太郎と鶏牛子に同調し、京浜川柳吟社連盟は『川柳人』を除名した。

昭和18年には戦況悪化により数々の柳誌が廃刊に追い込まれるなか、三太郎は軍部に協力することでプロの川柳作家であり続け、文学報国会の川柳部理事として、戦意高揚させる川柳創作の中心人物となっていった。

日本の余白南の洋ひろし　川上三太郎
隣組出せばあったぞこの力　川上三太郎
われ神を見たり白衣の列つづく　川上三太郎
おほみこと師走八日のほがらかさ　村田　周魚
時宗の心日本立ち上り　岸本　水府
今日の日のために男の子を育て　前田　雀郎

三太郎の句は、遺骨が届けられた遺族には悲しみなどなく、むしろ誇らしげである。周魚の句では、真珠湾攻撃の成功の報を聞き、天皇はほがらかな気持ちになったと詠む。水府の句は、鎌倉時代に元寇を退けた執権・北条時宗の精神で日本人は立ち上がっていると勇ましい。雀郎の句は、出征の日のために子を育てあげたと詠んでいるが、そんな親などいるはずもない。これらの句には戦争により踏みつけられ死んでいく大多数の弱者には一切触れられておらず、信子や鶴彬が詠んだ句とは対照的である。

戦後、大家たちが戦争に同調・協力した歴史は消され、『川柳総合事典』（尾藤三柳編）などにも見当たらない。三太郎は、戦争に協力したことや「川柳人」弾圧事件に関わったことについて自己批判をしたか知る由もないが、三太郎自身は戦後も柳壇の第一線で活躍し続け、読売新聞の選者を19年務めたほか、選句欄は三十数種にのぼり、77歳で天寿を全うした。

■時実　新子　昭和４年～平成19年

岡山県九蟠村（現岡山市）生まれ。結婚後は兵庫県に住む。17歳で親が決めた商家に嫁ぎ、娘として妻として母として女として辛酸をなめたという。

昭和30年、川柳六大家の一人である椙元紋太（すぎもともんた）（明治23年～昭和45年）の『ふぁうすと』に籍を置くが、特異な作風なため柳壇の風当たりは厳しかった。しかし川上三太郎は新子の川柳を評価し、新子は三太郎に師事することになる。

昭和38年、句集『新子』刊行。昭和50年、個人誌『川柳展望』創刊。昭和62年句集『有夫恋』がベストセラーになり、神戸新聞平和文化賞受賞。後進の育成にも力を注ぎ、ＮＨＫ教育テレビ趣味悠々の川柳講座の講師も務めた。新子の川柳は、女性の情念を率直に、かつ激しく表現したものが多いことから、川柳界の与謝野晶子とも言われる。

熱高し相姦の藻の汚れ髪　新子
鉤（てかぎ）無用の柔肌なれば窓閉めよ　新子
杏（あんず）咲く自愛極まるわがメンス　新子
雨の守宮（やもり）も男恨みの赤目かよ　新子
ふたたびの男女となりぬ春の泥　新子
雪の夜の惨劇となるベルを押す　新子
西洋の男に抱かれ脱げる靴　新子
雪こんこ人妻という手にこんこ　新子
五月闇産みたい人の子を生まず　新子
はぐれるとズキンと乳房だけになる　新子
どこまでが夢の白桃ころがりぬ　新子

新子は戦後の平和な時代に活躍した川柳作家であり、鶴彬とは面識がない。しかし新子は鶴彬を評価し、以下のコメントを残している。

手と足をもいだ丸太にしてかへし
もう綿くずを吸えない肺でクビになる
屍のいないニュース映画で勇ましい

そうなのです。戦争中にこのような川柳を発表し、若くして獄中病死したのが鶴彬という川柳人でした。「ツルは偉い、口を閉ざされた民衆に代わってわずか十七字の川柳で闘った。よくやった」鶴彬に対する評価はこれもあなたの自由なのです。ただ、川柳の流れの中に、このような人もいたということを記憶して下さればよいと思います。

（時実　新子）

参考文献

『川柳の群像』東野八大著、田辺聖子編集
『近代川柳　石川近代文学全集18』
『雪と炎のうた　田中五呂八と鶴彬』
松本幸四郎著
『君は反戦詩を知っているか』井之川巨著
『川柳でんでん太鼓』田辺聖子著
『川柳人　鬼才　鶴彬の生涯』岡田一杜著
『鶴彬全集』一叩人編　一九九八年版　など

◇

お断り　第４回、第５回川柳講座は「はばたき」次号に掲載します。

七塚小、高松小６年生に
宇部先生が特別授業

さる６月28日、岩手県盛岡市から元校長・宇部功先生をお招きし、かほく市立七塚小と高松小で６年生を対象に特別授業をしていただきました。テーマは「鶴彬に学ぶ未来への道」。鶴彬を顕彰する会主催で、市学校教育課、生涯学習課の協力によるものです。

この特別授業は昨年、初めて高松小と大海小で宇部先生によって行われ、児童たちからたくさんの感想文が寄せられました。「こんなすごい人が昔、高松から出たとは」「初めて鶴彬を知った」といった驚きの声が聞かれました。今年は鶴彬生誕地の高松で再び、また、かほく市内にもその名を広めようと、七塚小でも実施しました。両校とも校長先生をはじめ先生方には細かな心配りをいただきました。

なお、授業の後、鶴彬のめいにあたる城戸寿子さん（かほく市高松在住）から、児童の皆さんに鶴彬の句入りのティシュ入れが贈られ、喜ばれました。

「鶴彬に学ぶ未来への道」

この七塚小学校は明治の時代からあるとお聞きしました。皆さん、６年生ですよね。（児童一同「はい」）。歴史を勉強していると思いますが、今、ここに来る間に百年以上の歴史を感じて来ました。まず、海が素晴らしいですね。学校の中にある石一つ一つにも百年以上の歴史を感じます。

今日は60分ですが、実は去年、高松の二つの学校で同じような授業をして、45分ではちょっと足りなかったんですよ。それで60分にして頂きました。まずゲームをしてみたいと思います。ゲームをすればリックスすると思います。

（先生は「だるまさん」のゲームをして教室を盛り上げました。）

昔の赤紙を見せ戦争について語る宇部功先生（七塚小）

その集中力があれば今日の授業は大丈夫だと思います。

（先生は「手と足をもいだ丸太にしてかへし」のタペストリーを黒板に貼る）

これ、何て書いてあるか読めますか？

（児童はおのおの読み始める。先生は「手と足をもいだ丸太にしてかへし　鶴彬」と板書する）

鶴彬という人の句で、石川県の高松出身の人で、本名は喜多一二（きたかつじ）といいます。世界で一番短い詩である五七五の川柳をやっている人で、川柳をやっている人なら知らない人はいないほどの有名人です。川柳をやっている人なら一度はお目にかかるほどの有名な作品です。

私が鶴彬を知ったのは、昭和50年代です。たまたま私が勤めていた岩手県の小学校の近くに鶴彬のこの句碑があり、この人はどんな人で、どんな作品を作ったのかなと思い、本を買って勉強しました（先生は岡田一杜著『鶴彬句集』を見せる）。一番先に買った本は岡田一杜さんという石川県の方が書いた本ですが、その中の代表句として、この句が載っています。

手や足をむりやりもぎ取る戦争

私は最初、一回読んだだけでは意味が全然分かりませんでした。誰か予想でこの句の意味が言える？「手と足」はわかるでしょ？「もいだ」って意味は分かります？（児童「枝みたいのをとる？」）。丸太は分かります？（児童「丸いタイヤ（笑）」）。今、電柱はコンクリートになっていますが、昔は木だったん

ですね。（児童「あー」）。

問題は「もいだ」。これ、どういう意味です？盛岡ではリンゴを木から採るときに「もぐ」と軽い気持ちで使います。でも、石川県では「もいだ」というと、痛くても無理やりにギリギリとる強い意味だと岩手県にいる石川の人から聞いたことがあります。

手とか足とかを無理やりとって人間を丸太のようにして「かへし」ですが、今なら「かえし」と書きます。では、誰が、誰に返したのか。そんなことは句の中に書いていないです。詳しく言うと、戦争のときの話です。（児童「あー」）

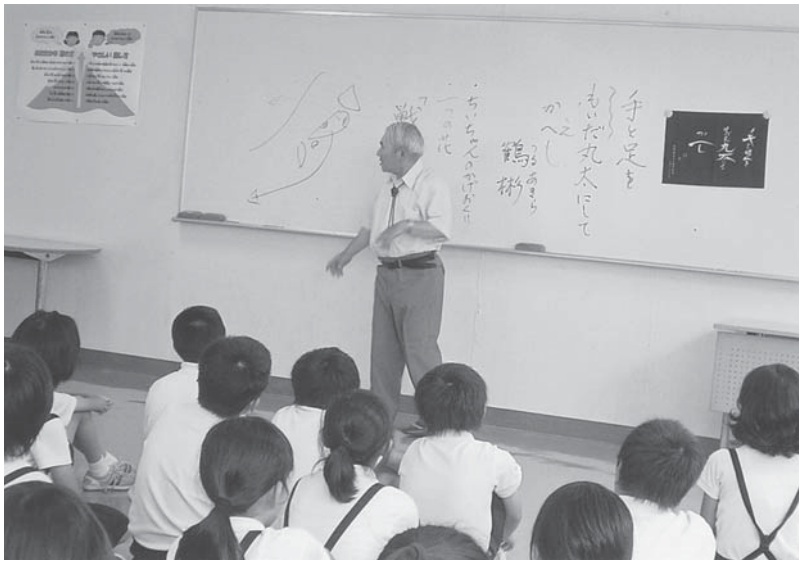
赤紙一枚で戦争に行かされる

（先生は黒板に日本と東アジアの地図を描く）

これから歴史で勉強していくと思いますが、かつて日本は大陸の方にも南の方にも攻めていきました。簡単に言うと、場所をとるための戦争です。原料が足りないから無理やりとるという残酷な話です。では、戦いにいくのはどういう人か？今朝、「とと姉ちゃん」を見た人は？　一人いますね。（児童「朝ドラ？」）。最後の場面で赤紙というのが出てきましたね。私、実際に持ってきました。（先生は赤紙を見せる）これ一枚来ただけで、無理やり戦争に行かされる。（児童「えーっ」）。これすごいですよ。臨時召集令状で、行く日と着く日まで書いてあります。そして着いた分のお金はこっちを切り取って差し上げます。だけど、行かない場合は捕まって牢屋に入る。（児童「えーっ」）。家族も捕まるかもしれない。親戚も捕まるかもしれない。（児童「えーっ」）。だんだんと戦争が激しくなったときには町内会の役員まで捕まったといいます。（児童「えーっ」）。

私は今町内会の会長をやっていますが、「町内のこういう人が戦争に行かないと言っているけど、それはあなたの監督が悪いんだ」と言われ警察に事情を聞かれ大変だったみたいです。これ一枚で、みんな兵隊にいかなければならない。そういう時代に作った川柳です。

戦争で三百万人以上の方が亡くなっているのですが、ほとんどが一般の人たちで、その頃は農家の方が多かった。岩手ではほとんど農業をやっている人だった。長男は免除されても、次男、三男より下の人は連れて行かれる。みんな若い人です。無理やり、赤紙一枚が来ただけで否応なく連れて行かれる。そういう時代でした。



６年生に鶴彬について語る宇部先生（高松小）

結局、兵隊に行った人たちはどういうことになるかというと、戦ったうえでケガをする。ところが病院というのは、ないんですよ。（児童「えっ？」）野戦病院といっても、テントを張ったぐらいです。そこに看護師がいるわけでもなく、手術するところがあるわけでもない。弾が手に当たると腐ってしまいます。腐ってしまうと、全身に回り死んでしまいますので、無理やりここ（腕）から切ります。「手と足をもいだ」です。（児童「あー」）。無理やりです。麻酔とかしないですよ。（児童「えーっ」「痛っ」）。冗談じゃないですが、本当の話です。ずっと上役の人は手当をされるのですが、二等兵とかそういう人たちは無理やり切られたり手を取られたり足をとられたりするんです。

そして無理やりまた返してくるんですが、返してこられても、結局は農家なので働けない。そういう現実を鶴彬は川柳にしたのです。「手と足をもいだ丸太にしてかへし」。鶴彬は非常に怒っています。赤紙一枚で無理やり連れて行って、ケガをさせられて、それでも命があって戻ってきた人はまだ幸かもしれません。ほとんどの人は亡くなった。戻ってきてもそういう状態です。

手や足のない人が街頭で募金

私はこの現実をちょうど皆さんの年齢と同じころ、盛岡の街でみました。９月にお祭りがあるんですよ。毎年、白い服を着て昔の戦闘帽をかぶってアコーディオンを弾いている

人が立っているんです。その隣にも立っている人がいて、何もしていない。ただ募金箱を持っている。私は母親と一緒に行って母親に「どうして、ああいうことしているの」聞いたら、母は私の袖を引っ張って「ここでは説明できないから家に帰って教えるね」と言って、家に帰ってから母は「実はあの人たちは戦争でケガをして働けない人たちなんだよ。アコーディオンを弾いていた人は、手があったから弾いていたけど、あの人の片足はないんだよ。義足だよ」と。「もう一人のお金もらっていた人は片手しか出していなかったでしょ。あの人は片手がないので、それを白い布で隠しているんだよ」と。

その次の年のお祭りの日に、よーく注意して見たんです。風がばっと吹いたときに、アコーディオンを弾いていた人の義足がかすかに見えたんです。その頃の義足は、鉄骨むきだしなんです。私はそれを見たとき、背筋が寒くなったというか、お祭りの気分ではない別の風が吹きぬけた気分になりました。まだ戦争はあるんだなと思いました。

鶴彬の句を知って、鶴彬が前もって「こんなことが起きるんだよ」と警告するために昭和12年にこの句を発表したのだと思いました。句を発表した翌年、鶴彬は亡くなっています。まだ29歳でした。

そのお祭りから何十年もたって、平成12年のときのことです。人口が６千人ぐらいの村の小学校に校長として行きました。全校児童百人ぐらいの学校です。６年生を連れてその村の神社に行きました。そこに戦争で亡くなった人の名前がいっぱい並んでいる碑があったんです。年齢を見るとみんな若いんです。年をとっていた人でも35歳。それを全部メモして地元の用務員さんに「この中で知っている人はいませんか？」って聞いたら、用務員さんが「この人の弟さんは戦争からケガして戻ってきている。80歳ぐらいかもしれない」と言いました。

田畑に行けず縁側に座って30年

私はその人を訪ねました。おりました。縁側にしょんぼりと座っていました。私が「お兄さんが戦争で亡くなられたそうで」と言いましたら、その人は「私も戦争に行っているんです。足をやられたのです」と。戦争から戻ってきて田や畑に出たことはない。30歳前に戻ってきたんですすが、60歳になるまでの三十年間、何をしていたか？　その人は、ほとんど縁側に座って近くの子どもたちの子守をしていた。その頃は幼稚園も保育園もない時代です。そんな子どもたちの面倒をみて60歳まで暮らしてきたといいます。

その人は悔しくて悔しくて、何回も死にたいと思ったそうです。みんな田や畑に行っている。自分は、それが出来ない。今のような機械化の時代ではない。まさに丸太になって三十年間を生きながらえた。「縁側が私の生きるすべてでした。こんなこと話したのははじめてだ」と涙ながらに言いました。「60歳すぎたら、じいちゃん好きなようにやって」と言われ、20年近くになると、その人は言っていました。

戦争やったら百年で終わらない

日本に帰っても仕事にならない。家族に迷惑かけているような気持ちでずっと過ごしてきた。それが自分にとってはすごくつらいことだった。戦争の本当の犠牲者だったと思います。「亡くなるよりもつらい思いをした」と言っていました。「おれあのとき、仲間と一緒に爆破されれば良かったなと、何度思ったか」とも言っていました。「このままやっていていいのか」と思い、50代の時、本当に自殺しそうになったと言います。これ以上家族に迷惑かけたくないと。

戦争は生き続ける。鶴彬は言っている。戦争は一回やったら百年で終わりませんよと。一生続きます。

だから今でも中国や韓国の人たちから、日本はいろんなプレッシャーを受けています。ある時は日本のサッカーチームが中国に行った帰りバスに石を投げられました。中国では日本がいかに中国大陸で悪いことしたかと授業で教えています。「うちのお爺さんやお婆さんたちは焼け死んだ」とか教えられています。永久に語り継がれていきます。

戦争は一回起こったら永久に続く。だから絶対起こしてはならないことです。止めなきゃなんない。

「戦争反対」と言ったら牢屋に

（先生は「言論の自由」と板書する）

鶴彬がこの句を発表した時代もすごいんです。今のように自由に私が「戦争は駄目ですよ。反対ですよ」とここで話をしたら、私は牢屋に連れて行かれる時代です。すぐそこで警察の人がちゃんと見ていて、「あなたは、学校でこういうことを話していましたね。警察に寄って下さい」と言われて牢屋に入れられる時代です。

そういう時代に過ごした先生に私は会っています。２回も捕まって連れていかれました。その先生は92歳で亡くなりましたが、戦

後になって「教師でいるために、僕は嘘つき教師だった」と言っていました。校長になったときも、そう言っていました。

皆さんはこれから社会科で勉強すると思いますが、ものを自由にしゃべったり書いたりできない時代に、鶴彬はこの作品を発表することになる。実は発表したいけど怖くて発表できない人はやまほどいました。自分がかわいくて、あるいは家族が捕まるかもしれないからやめる。

私の町内にも画家がいたのです。その画家は人物や植物画を描く画家です。でも無理やり大陸に連れて行かれて、無理やり戦争しているところを描けと言われて、「描かなきゃ殺すぞ」と銃を突きつけられて、無理やり描かされた。展示会に行くと、全部そういう戦争の絵でした。自由のない時代でした。自由にものを言ってはダメ。書いてもダメ。表現もダメ。歌もダメ。日本が戦争でうまくいくような歌かチェックされます。

（先生は鶴彬の年表と川柳、かほく市や全国の句碑の載った資料を配る）

昭和12年11月15日、『川柳人』という雑誌にこの６句を載せたため、鶴彬は特高警察に捕まり、牢屋に入れられるのですけれども、今「手と足をもいだ丸太にしてかへし」をやりましたので、それ以外の句を簡単に言います。

「高粱の実りへ戦車と靴の鋲」

高粱というのは、この辺でいうとトウモロコシを頭に浮かべて下さい。その背の高いトウモロコシがザーッと広く続いている中国の畑です。実りの頃ですから９月か10月頃です。そこに日本軍の戦車が突然やってきて、ガーっと押し寄せて、潰していくのです。（児童「ん？」）。農民が「明日、刈り取りだから一日待ってくださいよ」と言っても、戦時中は関係ないんです。その後に靴の鋲（びょう）と言って、軍隊の大きな足跡でさらに踏みつぶされていくのです。畑は全滅です。しかも中国の人の家が焼き払われたりしたんです。だから、中国の人たちは今でも日本の人たちを恨んでいるんです。戦争はそんなに残酷です。

「屍のゐないニュース映画で勇ましい」

屍（しかばね）とは死体です。死体の全然ないニュース映画だけ映しています。映画館でニュースを最初に見ます。日本が勝っているところしか映さないんです。誰も死んでいない。だから勇ましい。うそもいいところです。本当はいっぱい死んでいるんです。

「出征の門標があってがらんどうの小店」

突然に赤紙が来て軍隊に連れて行かれた人の店です。がらんどうですから、その店には何もなくなって、結局その店は倒産です。

「万歳とあげて行った手を大陸において来た」

これが一番、分かりやすい。皆さん、小学校３、４年生のことを思い出して下さい。（先生は「一つの花」と「ちいちゃんのかげおくり」を板書する）。「一つの花」のときに、ゆみっていう女の子がでてきでてきましたね、戦争に行くお父さんに「一つだけちょうだい」と言いますね。お父さんが皆に「万歳」といって送られていくときに、プラットホームの端っこに行ってコスモスをとってきてゆみにあげた。そして皆で万歳をして送られて、列車は出て行くという場面があった。まさに、万歳といって上げた手を大陸に行ってとられて置いて帰ってきた。これが戦争です。

「胎内の動き知るころ骨がつき」

最後「こつ」と読んで下さい。「ほね」と読まないで下さい。なぜ「骨」か。これは遺骨のことです。これは一番難しい句で、映画１本、小説１冊書かないと分からないくらいです。川柳の良し悪しは、巷（ちまた）のサラリーマン川柳のように「アハハ」と笑えるものなら30秒で終わっちゃうのですが、川柳の五七五の中にあるドラマは、一時間語っても、映画１本やっても、小説１冊読んでも、まだ終わらない内容でなければ、本物の川柳とはいえないんです。

「胎内の動き知るころ骨がつき」。実は私は、この句だけは、ここ７、８年前までは、学校の授業でやろうとしなかったんです。避けてきたんです。ところがある学校で、この作品についてある女の子が質問してきたんです。答えざるを得なくなって、この話をしたら、その学級全員が泣いてしまいました。（児童「えっ？」）。そこで私もどういうふうにすればいいのかなと考えてきました。ここ、７、８年前から、この句も是非入れなければならないと思うようになりました。

児童の涙を誘う悲しい句

戦争に行く前に結婚した若い兵隊さんは赤紙が来て戦争に行ってしまい、奥さんは日本に残る。何カ月かして、奥さんのお腹がだん

だん大きくなる。お腹を触ると動きが伝わるようになる。そこまではすごく明るいニュースです。道で会う人に「よかったね」と言われ、町内会の人が集まってきて「みんなで赤飯でも炊いて、お祝いしましょうね」と言っているときに、「骨がつき」。（児童からシクシクと泣き声や、鼻をすする音が聞こえはじめる）。戦争に行った旦那さんが白い箱に入って、遺骨が届いた。結局は生まれてくる子どもはお父さんを見ていない。こんなドラマです。

実際これと全く同じ人に５年くらい前、盛岡の学校で授業したとき、出会いました。担任の一人が、その一人だったのです。その担任の先生は「実は私は父親を知りません。高校生になるまで母は本当のことを教えてくれませんでした」と。それまでその先生のお母さんからは「お父さんは遠くに働きに行って帰ってこないんだよ」と聞いていたんだけど、実際は「胎内の動き知るころ骨がつき」と全く同じドラマだった。そうして生まれた人が国内にいっぱいいるということは、まだ戦争は終わっていない。永遠に悲劇が続いている。

鶴彬の映画、盛岡でも超満員

「胎内の動き知るころ骨がつき」は高松の浄専寺さんに句碑があります。この句は鶴彬の映画がきっかけで立てられました。これは盛岡で上映されたチラシですが、鶴彬の映画は全国で上映され、盛岡でも１回では入りきれず、２回に分けて６００人が入りました。資料にある「可憐なる母は私を生みました」の句碑は鶴彬の生まれた当地にあります。他にも「枯れ芝よ団結をして春を待つ」の句碑。高松の歴史公園にあります。この句も素晴らしい句です。これらの句碑が高松にはありますので、みなさんも是非行ってみて下さい。

盛岡の松園という所には「手と足をもいだ丸太にしてかへし」句碑がありました。何であるのかな？　ということですが、これもドラマです。鶴彬のお墓はどこにあるのかが全く分からなかった。鶴彬の研究家が長年あちこち探し歩いて、昭和50年代になって盛岡の光照寺というお寺に鶴彬が眠っているということが分かりました。鶴彬のお兄さんがたまたま盛岡にいて、お兄さんが東京に行って、鶴彬の遺骨を引き取ったのです。

平成２年、私が赴任した小学校の地区が、鶴彬のお兄さんのいた地域でした。家庭訪問の帰りにたまたま喜多という表札を見つけましたので、「もしかしたら」と思い寄ってみたら、そうでした。喜多という苗字は盛岡では珍しいんです。鶴彬のお兄さんは亡くなっていましたが、息子さんの代で、今でもうかがっています。（「手と足をもいだ丸太にしてかへし」のタペストリーを見せ）これは染物屋さんをしているお兄さんが作ったものです。

平成24年に松園にあった句碑を光照寺に移転しました。私は昨年の12月に句碑の拓本をこちらの鶴彬資料室に寄贈しましたので、機会があったら見て下さい。

鶴彬が一番尊敬した石川啄木

もっと鶴彬が盛岡と関係があることを言えば、鶴彬が大好きだった人は誰かというと、（先生は「石川啄木」と板書する）明治の時代に生きて、若くして亡くなった短歌を作る人で岩手出身の人でした。石川啄木は東京に出て与謝野晶子に短歌を学びました。

鶴彬は皆さんぐらいの時に、石川県の高松で石川啄木の短歌をほとんど知っていました。啄木は皆さんぐらいの時に地元の新聞で俳句とか短歌とか出して入選する力があったすごい人材です。それくらいの勉強家でした。その石川啄木を鶴彬は一番尊敬していた。なぜかといえば、石川啄木には暮らしに合う短歌が多いんです。ですから、鶴彬はそこにひかれたと思いますし、啄木の考え方にひかれたのだと思います。

鶴彬は評論がうまい、作文がうまいんです。川柳より評論がうまいといった方がいいかもしれない。鶴彬は自分に川柳を教えてくれた川柳の大家と石川啄木を比較して評論を書いています。ふつうは川柳を教えてくれた大家を偉いと書くものですが、でもやっぱり石川啄木が凄いと書いています。何が凄いか。やはり、時代を先取りする、未来を見ている力が石川啄木にあった。鶴彬にしたら、そこが一番大事だったということだったと思います。

鶴彬は言論の自由は駄目だといわれているのに、何でこんな川柳を出したのか？「捕まりますよ」といろんな人に言われていた。でもやはり、このとき句を出さなければ、もしかしたら日本はもっとひどいことになると思った。

自分もかわいいし、家族や親戚のことを考えると出せない人がいっぱいいるんですよ。だから途中から「これはちょっとおかしいんじゃないの？」と思っている人たちも、国の言いなりになって、徐々に戦争賛成に変わっていくのです。

その最たるものは高村光太郎という詩人です。この詩人は昭和13年代、日本のトップにいた詩人なんです。この詩人ですら、自分がやっぱりかわいくなってきたのか、周りのことを考えたのか、国の言いなりになっていきます。鶴彬はショックを受けたかもしれない。言論の自由が徐々に徐々に侵されていく時代に、これをやったらおしまいだ、そういうことになれば日本の国が危ない、と鶴彬は思った。

石川啄木の考えの元になっている人がいました。（先生は「田中正造」と板書する）。後で社会科で勉強するとき足尾鉱毒事件で教科書に出てきます。この田中正造も若い時に岩手に来ているんです。いずれ田中正造自身も平和が一番だと言っている。自分の財産を全部寄付して亡くなった。ちょうど私と同じ年齢です。

田中正造は明治の時代に天皇に直訴するんです。直訴というのは、「村の住民たちは困っています。私は命を捨ててもいいから、村の住民を救って下さい」と書いた文章を当時の明治天皇に出すのです。そうすることは、自分の命を捨てることなのです。田中正造はつかまったのですけれども、殺されず住民運動をした。それだけ偉大な人物で、国会議員もやった人です。栃木県佐野市の出身です。江戸時代生まれの人です。

実は、田中正造が直訴したニュースは全国に広まり、石川啄木は新聞を見て、すごい人材がいると知って、高校生ぐらいのときに、町の中で新聞を売るアルバイトをして、その募金を教会を通して田中正造に送っているんです。だから田中正造の墓の隣には石川啄木の歌碑があります。石川啄木は田中正三の影響を受けている。

田中正造―石川啄木―鶴彬

田中正造は国会議員を途中で辞めて、人民のためにすべてを捧げた人です。明治の時代に公害問題を日本で最初に国会で演説した人です。その後、日本は昭和になって公害列島になってしまった。未来をしっかり伝えたのだけど、当時誰もそれを本気にしてくれなかった。石川啄木はそこのところを感じた。

鶴彬は、啄木の晩年に生まれているのですが、鶴彬は石川啄木の短歌を読んで、すごい人材がいるんだな、自分も勉強しなきゃと思ったのじゃないでしょうか。そして短歌ではなく川柳という道を選んでいく。

その三人は互いに会ったことはありませんが、三人がつながっている接点は、未来をどう見るかなんですよ。今どうかではなく、今後の日本をどうするか、これからの私たちの暮らしをよくしていくためにはどうしたらよいか、それを考えた人材です。亡くなった年は鶴彬は29歳、石川啄木は26歳。田中正造は71歳。今、問われているのは平和をどうしていくかということですが、戦争だけは絶対駄目だと鶴彬は言いたかったと思います。

田中正造は未来を見る目があったし、高い志があったから全国の社会科の教科書にも載っています。以前は小学校の６年生の国語の教科書にも載っていましたが、消えました。原爆を扱った「石うすのうた」という６年生の教材もいい教材でしたが、それも消えました。戦争は突然やってきません。じわじわと言論の自由をしめるようにやってきます。言論の自由が危うくなったとき戦争は近い。言論の自由がなくなったとき、もう戦争は始まっています。

岩手でも９月14日の鶴彬の命日の前後に鶴彬祭をします。今年は東京から10人くらいお客さんが来る予定です。たくさんの方々に鶴彬の生き方が平和に貢献しているということを伝えていきたいし、皆さんがこのかほくに住んでいるからこそできることがあります。さっきも言いましたように一年に一回、一か所でもいいから鶴彬の句碑を見て回る。自分一人ではなくて、家族と一緒でもいい。いずれ、そういう思いをまた次の代へ伝えてほしいです。句碑を見て、家族やいろんな人に、平和が大事だよ、戦争だけはしない世の中にしないといけないよと伝えていく。そのことが、私がここに来て一番お話ししたかったことでした。かほく市から鶴彬を全国に発信していって下さい。

「鶴彬からのプレゼント」

ここで、皆さんへ鶴彬からプレゼントがあります。鶴彬の親戚の城戸さんがかほく市に住んでいまして、鶴彬の作品を手作りで一つ一つ丁寧に作って、皆さんにこれからお渡しします。鶴彬だと思ってください。私もこれを頂いて、岩手県のいろんな学校で授業するときにこれを配っています。

「平和の大切さ」児童ら次々感想

（七塚小学校の先生）鶴彬さんはどんな人なのかなと、最初は全然分かりませんでしたけど、たっぷりお話を聞かせて頂きました。川柳ってどんなものかも分かりました。その時代のいろんなお話を聞いて、鶴彬さんは川柳を通してどんなことを伝えたかったのかな？今日のお話を聞いて感想を言って下さい。

（半数以上の児童が挙手をする）

（男子児童） 鶴彬さんは命を懸けて平和を望んでいたので、とてもすごいなと思いました。

（女子児童） 「手と足をもいだ丸太にしてかへし」で最初は何か分からなかったけど、とっても戦争が怖いということが分かったし、鶴彬さんがこういう川柳を書いていることも分かり良かったです。

（女子児童） 鶴彬さんの一つ一つの川柳で、戦争の怖さが伝わりました。

（女子児童） 鶴彬さんの戦争を止めたいという気持ちや平和を願って川柳に書いていたのだと思いました。

（女子児童） 鶴彬さんの川柳で、今の時代にどんどんつなげて、戦争のことをつなげていると思いました。

（男児児童） みんなこういう平和を願っていて、少しでも「戦争は危ないものだ」と言ったら捕まってしまうのに、それでも鶴彬さんはそういう川柳を書いていて、すごい人だと思いました。

※この授業録は七塚小学校の授業をテープ起こししたものですが、高松小学校の授業で宇部さんが言及したことも一部加筆しました。

（文責・寺内徹乗）

特別授業の感想を述べる児童（高松小）

高松から素晴らしい人が…

喜多高松小校長先生があいさつ

昨年度まで高松中学校で教頭をしていた喜多由紀高松小学校校長から、特別授業の前に次のようなあいさつがありました。

宇部先生は、いわて子ども川柳を育てる会の会長ということですけれども、先生をしながら子どもたちに川柳を教えてきた先生です。川柳は本当に短い短い詩の形式だけれども、子どもたちが自分たちの思いを表現できるものについて、一生懸命指導されてきた先生です。

今回は高松出身の鶴彬さん。知っている人はいますか？（５、６人が挙手）。先生自身も鶴彬さんについては中学校で子どもたちが市民川柳で入賞しましたということで、「えっ、それは？」というところからの出会いでした。本当に高松という地で素晴らしい方が出ていた。戦争に反対する気持ちを川柳にした。石川県だけではなく全国的に大変有名な詩人が実は近くにおいでたということで、中学校にいたときに知りました。子どもたちのほうから「鶴彬さんはね・・・」と教えてもらう機会がありました。みんなも、宇部先生から鶴彬さんのすばらしさを教えてもらって下さい。そして中学生になったときに、逆に中学校の先生に教えてあげて下さい。鶴彬を知らない先生もたくさんいます。そのためにも、今日は宇部先生のお話をたくさん聞いて下さい。

宇部先生特別授業の感想文①

（アイウエオ順）

かほく市立七塚小学校６年

●平和ひとすじ、すごい勇気の人

《赤坂　舞》 私はこの鶴彬さんの話を聞いて、川柳にはとても深い意味があり、その川柳一つでドラマ一本が出来上がるそんな川柳に意味がこめられており、それを作った鶴彬さんは、すごいと思いました。そして私が一番心に残った川柳は、『胎内の動き知るころ骨がつき』です。母の胎内に子ができ、だがそのころ父は戦争で亡くなった。そしてかんおけの中に骨だけがあった。そんな、とても意味の深い川柳を作る事がとてもすごいと思いました。

私は『手と足をもいだ丸太にして返し』にもすごい意味があるんだな、と思いました。

最初は、どんな意味？「もいだ」ってなに？と思ったけど、とても怖く、残こくな事なんだなぁと思いました。

そして鶴彬さんは、戦争はおそろしい、戦争はぜっ対にだめだ！それを警さつにつかまる覚悟でみんなにうったえかけたのがすごい勇気だと思いました。私は鶴彬さんは、とても勇気がある平和ひとすじの人だと思いました。

●思ったことを言えない戦争の時代

《秋山　湊翔》ぼくは、鶴彬の川柳で「手と足をもいだ丸太にしてかへし」が心に残りました。わけは、手足をけがしただけで、何も思わず切っていて切られた人は痛くて、ちょっとかわいそうだからです。ほかの川柳では「萬歳とあげて行った手を大陸において来た」が心に残りました。戦争でけがをしていない人は、とても運がいいと思いました。戦争の時代は、自分が思ったことを言えなくてそのころのけいさつは、ひどいと思いました言論の自由がなくてかわいそうだと思いました。

鶴彬さんは、ただ自分の思ったたことを言っただけでろうやに入れられて、二九歳で亡くなるのが早すぎたと思いました。これからは、戦争をしてほしくないです。ぼくは、戦争をしてほしくないです。

●何にも恐れない人になりたい

《浅田　響》鶴彬さんのお話を聞いて、ぼくもなにもおそれないこの人のようになりたいと思った。なぜなら、言論の自由の書くこと、しゃべることとさらに表現をすることまで禁止されているのに、おそれず、数々の川柳を残しているので、ぼくもこんな人になりたいと思った。

鶴彬さんの川柳は、とてもいい物ばかりだし、とても説明しようとすると、映画１本、小説１冊でも足りないくらい長いものになるとうべさんがいっていたのを聞いたときに、そんな長い文をすごく短く、よみやすくしている鶴彬さんはなんてすごいことをなんどもしている人なんだ、とわかったときに、「すごいな」と思った。二十九さいで亡くなってしまっているけど。今でも岩手県でも、もちろん石川県でも有名な人なので、ぼくもその人の川柳を読みたくなった。ぼくも鶴彬さんのようにこの世の中では名前の知らない人なんていない人になりたい。お話を聞かせていただきありがとうございました。

●川柳で戦争なくそうとした鶴彬

《石山　斗揮》鶴彬さんの講演会で、鶴彬さんについてくわしく話してもらってありがとうございました。ぼくは、鶴彬さんは、川柳で戦争をなくそうとして伝えているのですごいと思った。鶴彬さんの作品で「手と足をもいだ丸太にしてかへし」というのは、最初聞いたときは、意味が分からなかったけど、うべさんの話を聞いたら戦争で手と足をなくした人のことだったのでびっくりしました。鶴彬さんは、戦争に行った人の思いで川柳をかいていたのですごいと思いました。鶴彬さんは本当に戦争をとめようとしていたので本当にすごいと思いました。鶴彬さんの川柳で「胎内の動き知るころ骨がつき」などがいい作品だなと思いました。今日の鶴彬さんの講演会ありがとうございました。

●「戦争は今も続いている」納得

《上島　まなえ》私は、「体内の動き知るころ骨がつき」について感想を書きます。赤ちゃんができて幸せいっぱいだったのに、夫の「骨」が送られてきて悲しみに変わったところが心に残りました。父は赤ちゃんの顔を見ず、赤ちゃんは父の顔を見れない。こんな人が今もいると思うとすごく悲しくなりました。

この川柳や他の川柳をかいたから、警察につかまってしまったと初めて知りました。そのとき、私は、鶴彬さんが戦争を終わらせたいという気持ちでかいていたのにどうして警察につかまるのかなと思いました。でも昔はこういうことは仕方ない時代なんだなと思いました。

「戦争はまだ続いている」と聞いたとき少しびっくりしました。けれど、戦争で家族を失い、苦しんでいる人がいると思うと、確かに戦争は今も続いているなと納得できました。

私は、これから、戦争で今も、泣いている人の気持ちを少し、考えてみたいと思います。

●「戦争はだめ」と改めて思う

《梅本　亜依》鶴彬さんの講演会で、私は、鶴彬さんは川柳で戦争はしてはいけないと伝えたかったのかなと思いました。でもそのころは、「戦争はだめ」というようなことをいうだけでろうやに入れられたりしたのに、命がけで書いていたことがすごいと思いました。鶴彬さんの代表的な作品の「手と足をもいだ丸太にしてかへし」というので、最初開いたとき、手と足をもいだ丸太とは何だろうと、不思議に思いました。

でも、うべさんから「じゅうにうたれて手や足を切らないといけない」と聞いたとき、手や足がなくなってしまうからなんだなと、ちょっとこわさをかんじました。「胎内の動き知るころ骨がつき」は、おなかの中に赤

ちゃんがいて、そのころ戦争に行ったお父さんの骨がかえってくるというのが「手と足をもいだ丸太にしてかへし」よりもっとこわいと思いました。鶴彬さん講演会で、戦争は二度と起こってはいけないものだと改めて分かりました。

●赤紙一枚で人生が変わるとは

《岡島　柚葉》私は、鶴彬さんのお話を聞いて、切ない感じやこわい感じになりました。岩手県のうべ先生が教えてくれた話には、とても今の感想とは思えないほどでした。特に私の印象に残っているのは、「手と足をもいだ丸太にしてかへし」という文です。もしかするとこの文には、鶴彬さんがよほどおこった文で、「全てを返せ」と思っているのかもしれません。

鶴彬さんが言っている事は、私も分かると思います。赤紙という紙きれ一枚で人生が変わるとは、考えにくいものです。もし、戦争に行ったなら、けがをする人が多くて、もし、戦争に行かなかったら、ろうやに一人か家族全員が入らなければならないという問題。どっちにしろ、私は、両方ともこんな考えで自分の人生が他人によって終わることは絶対いやだと思います。

この話を聞いて私は、そのころの戦争は、あまりにもひどいものだと分かりました。そのときの鶴彬さんはすごいと思いました。

●「未来を変えたい」かっこいい鶴彬

《奥田　実莉》今日、鶴彬さんの話を聞いてとても感動しました。

なぜなら、戦争のときで戦争はよくない！などと言うと、つかまってしまうのに、鶴彬さんは、そんなことも気にせず、せんりゅうをかいて、思いを伝えていたからです。そして鶴彬さんは今を見ず、未来を見て、未来を変えようとしていてかっこいいなと思いました。

今回、鶴彬さんの話を聞いていて、とても鶴彬さんの日本を変えたい、未来を変えたいという強い気持ちが伝わってきました。

私は、これから鶴彬さんのように、強い心を持って、何事にもあきらめず、最後まで戦っていきたいと思いました。そして、未来をしっかり見て、未来をつくっていきたいと思いました。

今回、鶴彬さんが強い心を持っているというところを分かりやすく教えてくれてありがとうございました。

●せんしゃにふまれるさくもつ、くやしい

《金田　颯太》ぼくは、今日のつるあきらさんの勉強で、手と足をもいだ丸太にしてかへしで、なんでこんなことを、かいたのだろうと、さいしょは、思いました。だけど戦争でけがをしたからだとわかりました。たまが入ってくさったら死んでしまうし、もう話を聞いているだけでいやでした。そしてますいがなかったからぜったいぼくは、いやでした。だからかわいそうでした。

そして、せっかくそだてたさくもつがせんしゃであらされて、それと足でもふまれてかわいそうでした。自分だったら、もういやだという気持ちでくやしくなります。

そして、つるあきらさんがかいた手と足をもいだ丸太にしてかへしのとおり、みんな戦争にとりくんでとてもかわいそうでした。ぼくは平成生まれでよかったと思いました。そして、ぼくがもしも戦争のじだいに生きてたら、もう、自分の体は、バラバラになると思いました。

●悲しくて、残酷な戦争

《元女　愛花》今日の鶴彬さんの話を聞いて、一番心に残ったのは、川柳です。川柳は、戦争について書かれていたものばかりで、改めて、戦争は大変だなと思いました。その中でも、「胎内の動き知るころ骨がつき」という川柳が一番悲しいと思いました。「手と足をもいだ丸太にしてかへし」という川柳で、じゅうで打たれて、くさる前に手や足を切るという事を聞いたとき、すごく、ざんこくだなと思いました。

戦争に行くときは、赤紙一枚で、行かないといけないのでとても大変だなと思いました。もし、戦争に行かなかったら、つかまると聞いたので、連れていかれる人も、その家族も、とても悲しいと思いました。

「枯れ芝よ団結をして春を待つ」という川柳が、高松にあるので、一回は見に行きたいです。

これからも、日本では、戦争をしないでほしいなと思いました。

●志高かった鶴彬、啄木、田中正造

《気谷　泰誠》ぼくは、鶴彬さんの話を聞いて、とても苦しい時代だったんだなと思いました。とつぜん赤紙がとどきそれがくると、ほぼ確実に戦争に行かなければならなくなってとてもかわいそうです。「高粱の實りへ戦車と靴の鋲」の話でトウモロコシの畑が戦車などで全部、なくなってしまうのがとてもかわいそうでした。

それからなんとか戦争から帰ってきた人も、けがなどで手や足をなくして仕事もできなくて、とてもかわいそうでした。

鶴彬さんは、戦争のとき言論の自由がないときにも、川柳を書いていて勇気があるなと

思いました。

「胎内の動き知るころ骨がつき」の川柳で生まれた子どもは、父親の顔が見れなくてとてもかわいそうでした。

鶴彬さんや、石川啄木さん、田中正造さんは、志を高くして生きていて、自分たちが作る未来を考えていて、すごいと思いました。

●形に表した鶴彬の正義感

《越野　藍》鶴彬さんのことを最初は何も知りませんでした。ただ名前だけ聞いたことがありました。

話を聞いた後の鶴彬さんの第一印象は正義感の強い人だと思いました。してはいけないと分かっていても、戦争をやめさせるために行動したところでそう思いました。

私も正義感は強いほうだと思います。いじめをするのは許せないところやニュースで犯罪のことが報道されるといろいろ言ってしまうからです。でも私の正義感と鶴彬さんの正義感はちがうと考えました。ちがうところは考えたことを現実に、つまり形に表すということです。鶴彬さんは川柳という形にしています。そこがすごいと思います。私もいつかなんでもいいので形にしていきたいです。

今日のお話を聞いて私は、これからみんなのために何ができるか、学校のために何ができるかを意識して考えていきたいです。そして考えたことを形にしていけるように日々過ごしていきたいです。

●戦争のない未来を作りたい

《小寺　真潤》私は、鶴彬さんの話を聞いて、「胎内の動き知るころ骨がつき」で戦争に行っておなかに赤ちゃんがいて、骨がかえってその子どもは、お父さんの顔が見れなくてすごく悲しいと思いました。赤紙がきて、行かなかったらろうやにいれられて、行かなかった人だけではなく、家族もろうやにいれられてかわいそうだと思いました。鶴彬さんは七つの川柳をつくってすごいと思いました。鶴彬さんは、戦争はだめという鶴彬さんの思い、願いを伝えて勇気があると思いました。志を高くして生きていた人たちはすごいと思いました。戦争に行って、手や足をけがしたら、手や足を、ますいもかけないで、手や足をきってかわいそうだと思いました。石川啄木さんと田中正造さんもすごいと思いました。好きなことを言ったらけいさつにつかまってかわいそうだと思いました。自分たちが作る未来は、戦争のない、平和な世の中にしたいです。

●戦争のおそろしさと平和の幸せ

《紺谷　佐絵》今日の講演会で、心にのこったことは、鶴彬さんが戦争中に、川柳つくっていたということです。戦争の時代は、戦争を否定するとつかまってしまう時代だったので、戦争の怒りを、川柳にしていて、すごい勇気だと思いました。今は、平和で戦争は、あまりやっていないけど、戦争は、おそろしいということが、鶴彬さんの川柳から、伝わってきました。その意味は、とてもこわくて、おそろしかったです。川柳の意味は、おそろしいですが、鶴彬さんの気持ちも、伝わってきます。私は、あまり戦争のことは知らないけど、講演会で、やっと戦争のおそろしさを学ぶことができました。戦争でたくさんの人々の命がなくなって、平和であることは、幸せだということがわかりました。今日のことを、頭に入れておいて、昔どんなことが起きたのか、この川柳の意味は何なのか、などを、覚えておきたいです。また、今日のことを、日々思い出していきたいと思いました。

●「胎内の…」の句に切ない思い

《紺谷　美帆》今日は鶴彬さんについての話を詳しく話してくださってありがとうございました。鶴彬さんは戦争についての苦しみを川柳でたくさん表現していて，すごいと思いました。特に母への思いをつづった川柳には、鶴彬さんが抱いていた悲しみが伝わってきて、とても切なくなりました。私が一番心に残った川柳は「胎内の　動き知るころ　骨がつき」です。母親のお腹が大きくなってきたころに父親はなくなってしまい、白い箱の中に入ってしまう…。と言う切ない意味がこめられていて、戦争はどれだけ悲しく、苦しいものかがよく分かりました。私の父親がもしいなかったらと思うと涙が出そうになります。戦争のつらさを表していてすごいと思いました。

鶴彬さんのことは名前くらいしか知らなかったけど、今日話を聞いて色んなことを知ることができました。たった17文字で自分の気持ちを表す鶴彬さんは本当にすごいと思いました。今日は本当にありがとうございました。

かほく市立高松小学校６年

●戦争に反対する強い思い

《赤崎　萌那》今日、鶴彬特別授業がありました。名前しか聞いたことがなく、何をしたかも知りませんでした。

始まり第一に川柳作家で石川県でまさに高松出身ということが分かりびっくりしました。「手と足をもいだ丸太にしてかへし」

この川柳を初めて見てどういうことを伝えているのか分かる人は少ないでしょう。私も初め全然わからなかったけど、よく考えると手と足をもぎとったという事は分かるんではないでしょうか。でもこの川柳は「戦争」に反対する鶴さんの強い思いがかかれていました。私は戦争の場にもいなかったし、生まれてもいませんでした。しかしこの川柳は長い年月の「戦争」を短くまとめていることが分かり、少しわかったようにも感じました。

この十七音という短い文で現実で起きた事を川柳にした鶴さん。この町に生まれた私たちをほこりに思い、いだいなる鶴彬をそんけいしていきたいと思いました。

●この授業で戦争に強い関心

《秋田　琉之介》ぼくは、鶴彬のことまったく知りませんでした。この、鶴彬特別授業のおかげで鶴彬が川柳作家ということがわかり、戦争への想いがとても強い人だとわかりました。「手と足をもいだ丸太にしてかへし」という川柳があります。その意味は、手と足をもいだ、もいだというのは無理矢理するということだから手と足を無理矢理とって日本に返すという意味でした。ぼくは、最初にそれを聞いたときとても戦争はおそろしいなと改めて思いました。鶴彬さんは、そんな戦争に関係した川柳をたくさんかいて、とても戦争に強い意思を持ち、どんなにきびしい世の中でも、戦争は絶対にだめだと死ぬまで考えを曲げなかったのですごいと思いました。

ぼくは、この鶴彬の特別授業によって、より戦争に関心を持つようになりました。もう二度と戦争は起こってほしくないと思いました。鶴彬は、高松にいた人なので、ほこりに思って、生きていきたいと思いました。

●鶴彬のことを広めていきたい

《荒井　大和》鶴彬さんは、石川県河北郡高松町に生まれる。鶴彬さんは、有名な川柳の作家さんということが分かりました。川柳には昔のことばがたくさんあって、意味が分からなかったけど、おしえてもらったおかげでわかりました。たとえば「手と足をもいだ丸太にしてかへし」の「もいだ」は、むりやりという意味があるということが分かりました。ほかにも「胎内の動き知るころ骨がつき」は、おなかの赤ちゃんが大きくなってうごきはじめたときに、父の骨がとどくといういみがわかりました。この学習で、鶴彬さんの名前しか知らなかったぼくが、鶴彬さんの川柳の意味もわかったのは、おしえてくれたみなさんのおかげだと思うのでこれからも、妹などにおしえて鶴彬さんを、ひろめていきたいです。

●身近な所に戦争反対の人がいた

《今井　希実》私は、鶴彬さんのことを、勇気があって、人思いだなぁと思いました。理由は、戦争があった時代に、戦争はしない方がいいや、反対などのことを口にしてはいけないし、書くこともゆるされない時なのに、警察につかまることをかくごしてまで、戦争をやめたいということを詩によんで、思いがそれほど強かったと思うからです。それに、戦争の残こくさが伝わってくるような詩が、みんなに戦争のことを分かってもらって、ぎせい者が増えるようなことはしたくないという事が伝わってきたからです。

鶴彬さんは「鶴　彬」というのは、ペンネームで、本当の名前ではなく、本名は「喜多一二」といって、それに、川柳作家のなかで、知らない人はいないほどの有名な人だということが分かりました。

鶴彬さんは、二十九才で亡くなってしまったけど、いっしょうけんめい戦争に反対してくれた人が身近にいたのはすごいと思います。

●鶴彬のこと、よく分かった

《入澤　恒太》今日の、特別授業をする前までは鶴彬さんのことは、全く知りませんでした。

ぼくは鶴彬のことをよく分かりました。第一に、鶴彬さんはこの高松に生まれ、八才の年に父を亡くし、おじの喜多喜太郎の養子になったことが分かりました。第二に、「手と足をもいだ丸太にしてかへし」と戦争に反対するこころが強かったことが分かりました。第三に、鶴彬さんは戦争はとても悲しいことが起きると伝えたかったんだと思いました。

●勇かんな鶴彬の行動見習いたい

《上多　快生》ぼくは、この授業で鶴彬さんのことがたくさん分かりました。鶴彬さんは、川柳作家で戦争に反対する川柳をつくっていました。その時代は戦争に反対すると、警察につかまる時代だったのにそれでも反対したのでとても勇かんで強い気持ちを持っていた人だと思います。鶴彬さんは、戦争に行っている人たちのいろんな様子から川柳をつくっていて、一つの川柳にたくさんの想いがつまっています。そのたくさんの想いをたった、十七音で表しているところがすごいと思いました。そのことから昔の戦争をしているころは本当にみんなつらくて、苦しかったと思います。その中で、戦争についてくわしく考えていたすばらしい人が、このぼくたちの住んでいる高松の人だったというのがと

てもほこりに思います。

ぼくは、これからこの特別授業で学んだ鶴彬さんの行動を見習っていきたいです。この授業をしてくださった方々に感謝したいです。

●戦争の悲惨さ、つらさ伝わる

《海口　結子》鶴彬さんについての話を聞いたとき、私はとてもおどろきました。戦争に反対する言葉を出してはいけなかった、そんな時代に戦争に反する句をいくつもつくったからです

私はこの話を聞くまで、「鶴彬」という名前もしりませんでした。でも、今はその人がどれだけ戦争に反対していたか伝わってくるようでした。本名の「喜多一二」という名前ではなく、ペンネームで「鶴彬」と変えてまで、句を書きつづけていたからです。それに、戦争がどれだけひさんだったか、つらいものだったかということが強く伝わりました。本人も戦争のつらさを体験しているからこそ、できる句だと思いました。二十九で死去したと書いてあったけど、もっと生きていたら、どんな句をつくっていただろうと思いました。

鶴彬さんは、よく戦争の中で句をかけたと思いました。私だったらこわくてすぐにやめているでしょう。だからこそ、鶴彬さんの勇気を、すごいことだと思いました。

●一人で戦争反対、かっこいい

《大木　彪悟》ぼくは、鶴彬さんの事を聞いてすごいと思いました。わけは、国中が戦争しなくちゃだめだと思ったときにたった一人で戦争はだめだといってたちむかう姿がすごいと思ったからです。ぼくは国中が戦争しなきゃと思っているときに戦争はだめだときっぱり言ってくれたら、たのもしくてたまらないと思います。そんな事をしてくれたらどんなにうれしいかぼくには分かりません。でも、とてもかっこいいのは分かります。そんな人が高松に住んでいたのはとてもうれしいです。ぼくはほこりに思います。鶴彬さんは、どれほどくるしい戦争の中の生活をしたかびしびし伝わってきます。鶴彬さん以外にも、全国でくるしくて寂しい思いをしたかと思うとぼくはこの時代に生まれて本当に幸せだとじっ感しました。鶴彬さんの文章からその時のきびしさ、寂しさ、くるしさを本当に感じました。生活にせいげんをつけられ、なのに野菜は戦車とくつでふまれ、どんだけのくつじょくかわかりません。

●歴史公園の鶴彬句碑をぜひ見に

《大西　凛》わたしは、鶴彬さんの話を聞いて一番に思ったのは、戦争はこわいなと思いました。

理由は戦争反対について話したり、本をかいたりしても、ろうやに入れられてしまったからです。

それでも、鶴彬さんは、せんりゅうでろうやに入れられてしまうと分かっていても、戦争に反対しつづけたので、すごいなと思いました。

あと、鶴彬さんは、戦争の事について、本一さつでもまとめきれないことを、たった十七文字でまとめて何個も出しているので、それほど戦争はひどい物かもよく分かりました。

歴史公園に「枯れ芝よ団結をして春を待つ」というせんりゅうがあってだれがなんのためにつくったのか最初はよく分からなかったけどよく分かったので、こんどまた家が近いので見に行きたいと思いました。

鶴彬さんの句を読んでやっぱり戦争はぜったいやってはならないと思いました。

●鶴彬のすごさ全国に広めたい

《岡田　心》私は、初め名前だけ知っていました。でもどんなことをしたのかまでは知りませんでした。

話を聞いているうちに鶴彬さんがどれだけすごい人なのかを知りました。自分の一生をかけて、戦争は反対とうったえ続けていたと知ると、どれだけ戦争に対して熱い思いがこめられていたのか、びっくりしました。高松にそんなすごい人がいると知って私も全国の人に知ってもらいたい、すごさを広めたいと思いました。

この時代はなにもかもがむりやりに決められる時代だったのも初めて知ることができました。そして、この時代に生きていた人は、どれだけ苦しい、つらい思いをして生きていたのか分かりました。

自分のしょうがいを捨ててまでも戦争に反対する思いがつまっていました。戦争は一生くり返してはならないものだとこの特別授業であらためて分かりました。ありがとうございました。

●鶴彬と同じ町に生まれよかった

《沖野　幸叶》私は、鶴彬という名前しか分かりませんでした。鶴彬という名前は本名だと思っていましたが、本名は喜多一二だということが分かりました。

鶴彬さんが作った作品の中で一番心に残っているのは、「手と足をもいだ丸太にしてかへし」という作品です。初めこの作品をきいたとき意味はよく分からなかったけど意味をきくと少しこわくなりました。昔、戦争へ

行っていた人の気持ちがこの作品で分かるような気がしました。鶴彬さんが書いているさまざまな作品は、戦争はこういうものだ、戦争はやってはいけない、などのことがかかれていてとても勇気ある行動だと思います。

鶴彬さんに関係する人は石川啄木という人で一番信頼している人だということが分かりました。

鶴彬さんは二十九さいという若さでなくなっていたけど、何十年もの間、い骨が見つかっていなかったというのにはとてもおどろきました。

私たちは、このとても有名な鶴彬さんの出身地、石川県かほく市高松町に生まれてとてもよかったと思います。

これからの社会の授業では、鶴彬に関係する「石川啄木」「田中正造」についてくわしく調べていきたいです。

●母への思いをつづった四句

《小野　凪葉》特別授業で鶴彬さんについて学びました。彬さんは一九一〇九年に石川県河北郡高松町に生まれ一九一七年に父が死んだことが分かりました。彬さんは二十九さいのわかさで死んでしまったのがかわいそうでした。

鶴彬さんの句碑マップを見ると「手と足をもいだ丸太にしてかへし」や「暁を抱いて闇にゐる蕾」などいろいろあってビックリしました。最後の六句もすごいと思いました。

母への思いをつづった四句もありました。十五さいのときに「しわに宿る淋しい影よ母よ」十六さいのときには「飯粒をいただいて拾うわが母」などあることがわかりました。

私が今日になるまで鶴彬さんのことを知らなかったし、まず、存在もわからなかったけど、今日、はじめて鶴彬さんのしたことなどいろいろわかったし、いろいろな句碑や四句などがわかったのでよかったです。今日はありがとうございました。いろいろわかりました。

●自分の考えしっかり持てる人に

《織田　真帆》わたしは、今日の特別授業を聞いて鶴彬さんのことを初めて知った。最初に「手と足をもいだ丸太にしてかへし」という鶴彬さんの川柳を聞いたとき全く意味が分からなかった。説明を聞いて、戦争に関係があることだと分かり、鶴彬さんは戦争に反対する川柳を書いていたことを知った。学校でも、戦争についての授業が今までよくあったし、テレビや本でも戦争を知ることができた。でも鶴彬さんの一生や川柳からいままで知らなかったことについても知れた。戦争をしていた時代、言論の自由が制限されていた。「戦争をやめよう」「戦争はだめ」ということを言うと警察につかまってしまう。そんな時代でも、鶴彬さんはあきらめず戦争に反対し続けた。わたしだったら絶対に無理だと思った。警察につかまるのはこわいし、まわりの目を気にしてしまうだろう。そこがすごいところだと思った。

私もそんな鶴彬さんのように、自分の考えをしっかり持てるような人になりたい。

●時には勇気を出して何かを…

《折戸　咲菜》「手と足をもいだ丸太にしてかへし」など戦争に反対した川柳をかくことがすごいと思いました。理由は、当時、日本は戦争に対して意見をいうと、つかまったりするのに、勇気を出して、この作品を書いたからです。

鶴彬さんは、文章ではなく、五七五という短いあいだで、深い意味をこめ、川柳をつくったことがすごいです。私は、川柳は知っていたけど、しっかりと自分の気持ちをかいたり、深い意味が込められていることは知りませんでした。でも、上手に書くにはそうとうな技術が必要なことも分かりました。それなのに戦争に対しての思いを川柳として書いた鶴彬さんはすごい人なんだと思いました。

この授業を通して、私は時には勇気を出して、何かをすることが大切だと思いました。鶴彬さんの思いが、ずっと残っていくといいと思いました。

●心にぐっときた「手と足を…」の句

《金谷　章吾》ぼくは、去年のおねえちゃんが簡単に言っていたことは、鶴彬さんは、戦争に反対した人としか聞いてなかったので今日、鶴彬さんのことをたくさん知りました。鶴彬さんは、明治生まれで、石川県かほく市高松町出身と聞いたときびっくりしました。鶴彬さんは、県内じゃなく全国的にもすごい人ということが分かりました。鶴彬さんは、石川啄木さんと田中正造さんと関係があるということが分かりました。大阪城公園衛戍監獄跡にも鶴彬さんが書いた、句碑があることが分かりました。次に、鶴彬さんは、その時代、戦争反対と言ったり書いたらろうやに入れられるのに反対と言い続けた勇気はすごいと思いました。あと鶴彬さんは句碑をたくさん書いたりした所もすごいと思いました。次に、「手と足をもいだ丸太にしてかへし」という句碑は、心にぐっときました。最後に、鶴彬さんのお墓はなぜ石川県かほく市高松町に立ってなかったのか不思ぎと思いました。特別授業をしてくれてありがとうござ

いました。

●鶴彬そんけいの気持ち強まる

《金谷　菜美》私は、鶴彬さんについて、全然知りませんでした。でも、今日の授業で、鶴彬さんのすごさについて、よく知ることができました。鶴彬さんのような勇気のある、すごい方が私と同じ高松出身と知り、とてもうれしいです。鶴彬さんの、何があっても戦争をやめさせなければいけない、という気持ちが、すごく伝わってきました。その気持ちを川柳で表し、全国を代表するような川柳作家になったことを、とてもそんけいします。

戦争のことについて川柳で表して、周りからどれだけ冷たいことを言われたり、されたとしても、戦争を止めようと思っていたのが、すごくよかったです。

私は、戦争と直接関わったことはないけれど、今日のお話を聞いて、戦争はたくさんの人々を苦しませたということが分かりました。鶴彬さんは、そんな世の中を変えようとしていたのだな、と思いました。今日の授業でより、鶴彬さんをそんけいしました。

●「戦争反対」ずっと忘れずにいたい

《金谷　美奈》私は、鶴彬さんのことは名前も何をしたのかもぜんぜん知りませんでした。でも今日の勉強でよく分かりました。その中で、手と足をもいだ丸太にしてかへしと言う作品なども聞いてそれくらい戦争に反対していた鶴彬さんの気持ちがよく分かりました。鶴彬さんは高松で生まれたことを知りすごくみじかな人に感じました。そして、勇気のある人だなと思いました。もし私がその場にいるなら戦争反対と言うことを言っただけでろうやに入れられることが分かっていたのに、自分の命をぎせいにしてまで、戦争反対と言うことを伝えることは私はできないと思います。でも、今その状きょうになっていないから言えるかもしれません。本当にその場になり、自分が今本当に守りたいものやりたいことがあれば戦争反対と言うことをみんなに伝えるかもしれないと思います。でも戦争反対と言うことをこれからもずっと忘れないようにしたいです。ありがとうございました。

●鶴彬のこと、家族に話したい

《兼田　朝陽》ぼくは、鶴彬さんの勉強をして一番心に残ったことは、「手と足をもいだ丸太にしてかへし」という言葉で意見もわからずに聞いていて、意見を聞いた時は、すごく、こわくて、まずいもうたずに手や足を切断するのが自分がやっていなくても、想像するだけですごく痛そうだと思いました。だから、今までは、ただただ戦争はこわいと思っていたけど手や足を切断して国に帰ってくると聞いてとてもこわいと思いました。

鶴彬さんのことは、聞いたこともなかったし勉強になったし、高松がしゅっしん地だということを聞いてびっくりしました。そして、高松歴史公園に鶴彬さんの「枯れ芝よ団結をして春を待つ」という句があって、公園で読めなくてほっておいたけど、鶴彬さんが書いたというのをきいてびっくりしました。今日ならったことを家族に話をして鶴彬さんのことをしっていたら聞いて、みたいです。

今日の授業、ありがとうございました。

●鶴彬をほこりに思って過ごしたい

《北橋　美羽》私は、鶴彬さんについての話を聞いて、鶴彬さんはすごいことをしたんだということが分かりました。「手と足をもいだ丸太にしてかへし」などのせんりゅうには戦争はしたくないという思いや、戦争は大変だという思いなどがこめられていて、鶴彬さんはせんりゅうを作ってまで、戦争に反対していて勇気があるんだな、と思いました。けれども、その時代は、戦争反対などと言ったりすると、つかまってしまうので、その時の世の中は、ルールなどが厳しくて、たくさんの人たちが苦しんでいた、ということが感じとれました。そう思うと、今日本では戦争がないので、その厳しい世の中に生きていなくてよかったと思いました。それに、戦争に反対して厳しい世の中を変えようと頑張っていたのに、体調をこわして、29さいなのに亡くなってしまったので、びっくりしました。今日、鶴彬さんのことを学べたので、鶴彬さんをほこりに思いながら過ごしていこうと思いました。

鶴彬川柳教室に学ぶ

盛岡市立松園小学校６年

●戦争は憎しみを生むだけ

《村上　陽菜乃》私は今日の宇部先生の授業で鶴彬の句碑がつい三年前まで三十年間松園に置いてあったことが分かりました。授業を受けていて鶴彬から石川啄木、社会で習った田中正造がつながっているとは思いもしませんでした。今日分かったこの三人の共通点は命をかけたということです。これを知った時私は命をかけるということはなかなかできることではないと思いました。三人が盛岡に関わっていること、石川啄木と田中正造が明治時代で公害について同じ考えで石川啄木が号外で儲かったお金を田中正造に直接的な出

会いがなくても寄付をしていたことを初めて知ることができました。私はいろいろな話を聞いて戦争はしてはいけないと思いました。私は戦争をすることによって憎しみが生まれるだけだと思います。この時代には言論の自由がないので戦争のない世の中にと言えずに亡くなっていった人がいることが分かりました。

●未来をみすえた考えを共有

《福井　晴音》２月１日宇部先生に川柳などについて教えてもらいました。内容は、鶴彬さんの戦争反対の歌、それから啄木さんと正造さんのつながりなどを学びました。

鶴彬さんについて、一番頭に残ったのは、鶴彬さんが川柳を始めた理由についてです。

鶴彬さんは、啄木さんの歌を知り、啄木さんの歌をいつでも暗記できるくらい大好きで尊敬していたそうです。こうして、歴史に名を刻む天才が生まれるのだな、とびっくりしながらも感動しました。岩手にゆかりがあることもうれしかったです。

啄木さんと正造さんのつながりは、啄木さんが中学生の時、正造さんがうったえている足尾銅山の問題のことにお金を寄付するというもので、啄木さんと正造さんは同じ考えをもっていて、彬さんにもいえますが、直接的な出会いがなくても未来をみすえた考えが共有できるんだなと思いました。

●いろいろな人とつながっている

《昆野　真唯》二月一日の今日、鶴彬と松園の関係について学びました。

そこで、鶴彬と松園は直接つながってはいないけど、意外なところでつながっていることが分かりました。鶴彬は石川啄木にあこがれ、啄木は田中正造に寄付金を送り、正造は盛岡を通ったことがあるというものです。このように、自分の知らないところでつながっているので、全人類と自分は直接でなくてもつながっているのかなと思いました。

今日学んで、わたしたちはみんなつながっていることと、松園はやはり川柳の町だということが分かりました。

わたしは、松園の人として、鶴彬や石川啄木のことを知るだけでなく、戦争についても考えたいと思いました。また、川柳のことも知り、これからも川柳を考えてみたいと思いました。

●鶴彬、啄木、正造の関連に驚き

《吉田　彰平》今日、宇部先生から鶴彬を通して川柳の歴史、田中正造、石川啄木と松園の関わりを学びました。中でも特に、鶴彬は、石川啄木にあこがれて川柳を始め、後に命をかけて戦争のむごたらしさを伝えることになるということにおどろきました。啄木は、３年生の時にくわしく調べたことがあり、盛岡の先人の一人です。その啄木の時代を読む力に鶴彬は引きつけられたと聞き、石川啄木にいっそう興味がわきました。そしてもう１人時代を読む才能を持った人物がいたことにびっくりしました。それは、田中正造です。さらに啄木は、田中正造が、じきそをしたことに胸を打たれ、お金を寄付したと聞き、田中正造・鶴彬が、岩手にものすごく関わっていたことを初めて知りました。そして、この三人が関連があったことを教えてくれた宇部先生は、すごいなと思いました。

●鶴彬句碑が松園にあったとは！

《田沼　佑太》二月一日宇部先生の授業があった。内容は鶴彬のことだった。鶴彬とは、日本の川柳の世界のヒーローともいえるとても有名な人だ。その彬さんがあこがれたのは、玉山出身の石川啄木だ。啄木は有名な句を残している。啄木と同じ時代を生きた田中正造。この３人には共通したことがある。それは、「未来を見こし、日本に命をかけた人」ということだ。とくに鶴彬と正造は軍事国家の中でいろいろなことを訴えた。なんて勇気のある人だと思った。しかしそれよりおどろいたのは鶴彬さんの句碑が松園にあったことだ。何回も断られた時に、声をかけてくれたのが松園だそうだ。松園には優しい人が多い。だから松園だからこそできたんだと思う。いろいろな人の岩手とのつながりは、直接会ったりしなくても結ばれていったことに感動した。この松園をすごい所と確信し、暮らしていきたいと思う。

●新たなつながりを忘れずに

《大森　そら》私は、鶴彬、石川啄木、田中正造の三人の関係が、とてもよく分かりました。最後に、宇部先生が、私たちに「直接的な出会いがなくても」と話してくださいました。それは、とても印象に残りました。例えば、石川啄木と田中正造は、直接出会っていません。でもつながりがありました。足尾銅山の鉱毒事件で、鉱山の操業停止と被害にあった人々の救済をうったえたのが、田中正造でした。田中正造は、直訴し、このことを新聞で知った石川啄木は、寄付金を送りました。二人は、直接出会っていなくても、心が通じたのです。すごいことだと思いました。私たちは、石川県の方から、鶴彬の川柳がプリントされたティッシュケースをいただきました。感謝の気持ちとこの新たなつながりを忘れずに、これから、「出会い」を大切に生活していきたいです。

戦争を考える

即生寺・誓海寺の戦争体験に学ぶ会

かほく市の即生寺で毎年恒例の「戦争体験に学ぶ会」が７月10日に行われました。先の戦争末期、大阪から宇ノ気へ学童集団疎開をした野村捷久さんの講演「学童疎開と終戦」です。宇ノ気で暮らした約半年間の辛い、ひもじい、寂しい思いと、地元住民から受けた温かいお世話、そして、大阪へ帰ってから遭遇した悲惨な大空襲などが克明に語られました。野村さんは終戦前に大阪から横須賀へ移られ、その後、高校の教師をしてこられました。

宇ノ気を第二の故郷として心に刻み、疎開先の誓海寺さん（かほく市内日角）らと今も交流を続けているそうです。

なお、翌11日は、同じテーマで誓海寺でも講演されました。本堂を埋めた昔懐かしい顔ぶれに、野村さんは感無量の様子で、言葉がほとばしるように湧き出て、とどまるところを知らないようでした。以下、二つの講演を合わせてまとめてみました。

（文責・角島広治）

学童疎開と終戦

講演　野村　捷久

私は昭和７年の生まれで、84歳になります。小学校６年生の時、大挙してこのかほく市に空襲を避けて学童疎開をさせていただき、大変お世話になりました。食料の乏しい中で、皆様の温かいお心に接して、その時、私は「能登は優しや土までも」の言葉を聞いて、実感しました。今日来れなかった、亡くなった同級生に成り代わって厚くお礼申し上げます。

私は大阪の生まれで、小学校も卒業まで大阪ですが、半年ほどこちらにお世話になりました。それまでの勝った戦争、日清日露でのたくさんの事実を聞いて、これからの日本をどうするか考えていかなければならないと思います。温故知新、私たちが経験したたくさんのことを若い世代に伝えていくことが大切です。次々に語り継いでいってほしいと思います。

大阪の母校は焼け廃校に

私のいたのは大阪城の北側、北区の都島。都島小学校は全校児童１９００人余り、１学年６クラスもある大きな学校だったが、昭和20年の空襲で焼けてしまい廃校になってしまった。だから私の母校は疎開した宇ノ気小学校しかない。都会の学校だからグラウンドはアスファルト、２階建てのコの字型校舎だった。小学校３年生の時、12月８日、朝６時に臨時ニュースがあった。学校へ行くと校庭に一同整列をして、校長先生が開戦の詔勅を述べた。教育課程が変わってきた。「歴史」が「国史」に、「体操」が「体錬」に。小学生までも即戦時体制になっていった。

５年生の時、大阪に初めて敵機がきた。B17だった。その前に東京が初めて空襲された。避難訓練が行われるようになり、疎開が計画された。東京、大阪など都会から疎開先が指定された。大阪市は疎開先の食糧事情、交通事情、衛生状態などを考慮して石川県のほとんどのお寺に行き先を決めた。疎開は５回に分けて行ったが、私たちが第１回だった。

帰る家、親亡くなった子も

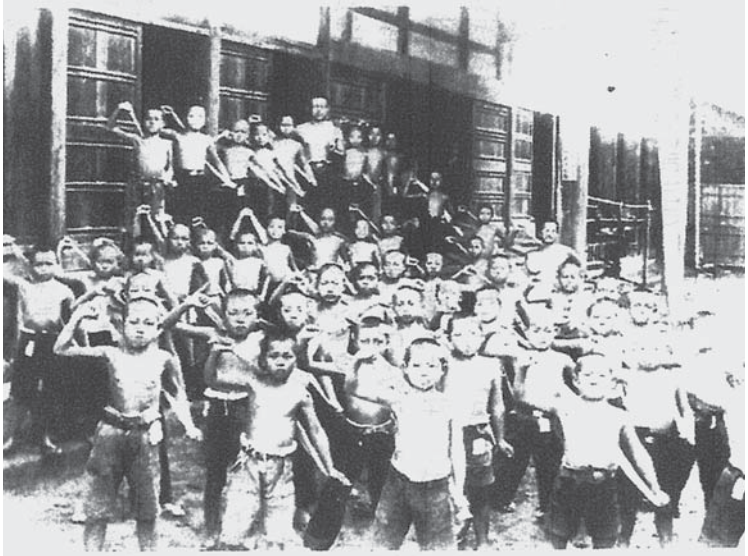
疎開には悲しいことがいろいろあった。20年６月の大阪大空襲の後、子どもたちが帰ろ

即生寺で学童集団疎開の体験を語る野村捷久さん

うとしても家は焼かれ、親も亡くなっていた。先生方はそのことを知っていたが子どもたちには話してなかった。帰るとなると言わなくちゃならない。列車が大阪駅に近づくころ、そうした子どもたちを呼び集めて、重い口を開いた。「実はあなたたちの家は焼け、お父さん、お母さんは戦災で亡くなってしまった。親戚の家があるならそこへ訪ねていきなさい」と。先生も児童も泣きながら大阪駅に着いた。行き先のない子は大阪市が長谷川学園などに引き取った。一番可哀想だったのは、親戚の家を訪ねて行っても、もうそこに親せきの家はなかったり、引き取ってもらえなかった子だ。そんな子は大阪駅まで戻り、戦災浮浪児になった。

さて私たちの疎開は、持っていく荷物は柳行李１つ、重さ30キロまでに制限された。食器、学用品、衣類以外の娯楽品、食料はだめだった。布団は掛布団、敷布団とシーツだけ。柳行李に巻き付けて学校からまとめて送った。学童疎開の場合、月に10円を学校に納めた。疎開に行けなかった子どもは、年間１２０円納められなかった者、夜尿症などの病気を持っている者などで除外された。

灯火管制で真っ暗な校庭に集まって出発した。大阪駅から蒸気機関車で米原経由、北陸線へ。特別配給のコッペパンが２個ずつもらえたり、ビスケットやサイダーなどいろいろなものを持ち寄って、ワイワイ、修学旅行のような楽しさだった。鯖江とか福井、大聖寺などの駅が記憶にある。本津幡駅で「ろ組」の児童が下りて行った。夕方近くになって宇ノ気駅に到着。小学校の校長先生をはじめ小学生たちがたくさん出迎えてくれた。盛大な出迎えでうれしかった。しかも、小学生たちが私たちの荷物を持ってくれてお寺まで歩いた。



誓海寺で元気いっぱい乾布摩擦する疎開児童たち

立派な宇ノ気小にびっくり

お寺には下駄箱に一人ひとりの名前が書いてある。大阪から送った荷物もカイコ棚のように整理して並べられてあった。なんて皆さんにご迷惑をかけていたんだろうと、後になって思いがこみ上げてきた。夕食の後はもうくたくたで、布団を敷いたらそのまま寝てしまった。実はその夜、台風が能登半島沖を通過したそうで、私たちは全く知らなかった。次の日は快晴。午前中、荷物の整理をして午後に宇ノ気小学校へ。立派な学校にびっくりした。広い敷地を紺谷先生（だったかな）が案内してくださった。大きな雨天体操場（講堂）に驚き、グラウンドが土なのに驚いた。夕方、帰り道にあった白山神社（宇ノ気神社）の屋根に夕日がキラッと光って、ド肝を抜かれるようなすごい印象だった。

学校は右手２階の青年学校を使わせてもらった。授業は午前２～３時間、午後１時間ぐらい、帰りは自由に帰ってよろしいということだった。宇ノ気川に踏み切りがあって、そこが好きで、よくぼやーと立って金沢の方を眺めた。一面に田んぼが広がって稲穂が実っていた。その中を七尾線の列車が煙を吐いて走ってくる。これは感動的だった。レールを眺めていると、この先に大阪があると思い、帰りたくなってくる。事実、何人かが線路を歩いた。すぐ捕まった。警察から連絡があって先生が引き取りに行った。何と寝巻のまんま、素足でドロドロだった。誰も笑わなかったし、先生も叱らなかった。

お寺の生活は、まず起床が６時。先生の号令でみな起きて布団をたたむ。何人か起きないのがいる。だいたいが寝小便している。その子の布団は丸めて御堂の裏に干される。誰のものか詮索などしなかった。でも、いつも同じ布団で、あるとき先生が「実は彼は夜尿症で」ということで、大阪へ戻された。ところが戻されてすぐに機銃掃射で亡くなった。

洗面の後、整列して「お父さん、お母さんおはようございます。兵隊さんおはようございます」とあいさつ、そのあとちょっと右を向いて、東京の方へ向かって皇居遥拝、10秒ほどおじぎをする。その後は体操。終わるとお寺の周りを掃除する者、配膳をする者などに分かれて作業。食事のときはみんなお椀を

持って並び、寮母さんにご飯を入れてもらうのだが、量が多いか少ないか目を光らせている。ひいきされている子がいて、いつも量が多かったため、先生が寮母さんに「子どもの顔を見ないでよそってください」と注意したこともあった。

忘れられない茄子の漬け物

おかずには大変気を使ってくださった。主として野菜だった。茄子のつけたものがおいしくて、いまでも茄子を見ると宇ノ気を思い出し、涙がこぼれる。ある時、何人か夜中に畑へ芋を盗みに行ったのがいた。先生に質されても誰も名乗り出なかったが、天罰てき面で次の日、一斉に腹痛、下痢の者が出た。薬はないので、治療として夕食は抜きとなった。これはこたえたようで布団の中で泣いていた。七塚のお寺に疎開していた５年生の女の子から、後で疎開日記を見せてもらったが、女の子だったせいか、食事はほとんどが菜っ葉入りのおじやだった。それに比べて私たちの場合は、芋や菜っ葉は入っていたがほとんどご飯で、よくぞお米を都合してくださったものと感謝した。

動物性タンパクの副食はほとんどなかった。たった一度、お正月の分宿でお世話になった吉田さん宅の新年宴会で、牛肉を好きなだけ食べてよいといわれた。あとは、河北潟へ行って鮒を釣った。大崎の方によく釣れる場所があった。雄大な自然、きれいな夕日を眺めながら膝まで浸かって釣った。それを焼いて煮つけにしておかずに出して下さった。

胡桃を食べることも初めて知った。おいしかった。栄養補給にもなった。下山田の池の周りに渋柿の木があって、干し柿にしてよく食べた。菱の実もゆでて食べた。栗のようでとってもおいしかった。自然の中に食べられるものがたくさんある事を知った。

学童は虱(しらみ)をよくわかした。週に何回か虱取りをやった。寮母さんのもとへ列を作って退治してもらったが、いたずらっ子が寮母さんの頭にそっと虱を落としたりした。でも寮母さんには本当によく面倒をみていただいた。感謝感激だ。

落穂拾いもよくやった。河北潟の広い田んぼで、霜の降りた寒い朝、結構たくさん拾った。落穂拾いもさることながら、白山の白い山をながめて深呼吸、新鮮な空気を胸いっぱいに吸って体も丈夫になった。病気をして寝込んだ者はあまりいなかった。

集団疎開の児童を世話した内日角の誓海寺

手紙は事前検閲だった。父母あてのものも先生の所へ持って行って「これで出してよろしいですか」と見てもらう。先生は「これはだめ。『あばら骨が見えてきた』は『あばら骨は見えなくなった』に直しなさい」と。でも最後は「元気にやっています」としめて出す。しかし、中には親にこっそり手紙を出すのもいる。親は心配して小包を送ってくる。小包は勝手に開けてはいけない。先生の前で開ける。先生は「これはだめ」と取り上げてしまう。主に食べ物だった。先生の押し入れにそれらはたまっていた。それを夜中に探りに行ったやつがいたが、何もなかった。あんなに取り上げてどこへやったんだとさりげなく先生に聞くと、先生は「大阪へ送り返した」という。私たちは一応納得。

父からの羊羹、便所へボトン

私も海軍にいる父親にこっそり手紙を出した。父親から「集団生活でお前にだけ送るわけにはいかない」と返事が来て、先生は感激して皆にそれを披露して下さった。次回のときに小包の中に、先生が見逃してくれたのか、羊羹が１本入っていた。やった！と思った。だけど四六時中だれかの目があって食べられない。便所の中ならと思ってこっそり持って行ったんだが、銀紙を解いたときドンドンと戸をたたかれ、羊羹は便壷へぼっとん。手が届かず悲しかった。あとで夢に見たほどだった。

ある時、皇后陛下から疎開の生徒たちにビスケットを下さった。「次の世を背負う身ぞたくましく正しく生きよ里に移りて」という御製の歌を添え、菊の御紋がついた恩賜のビ

スケット４枚か５枚袋に入れて疎開児童全部に配られた。が、数が足りなかった。先生らは重大なこととして調べたところ、菊の御紋がついた残骸の紙が便所の中から見つかった。これは大変なこと。今なら何でもないことだが、当時は菊の紋は踏んづけてもいけない時代、先生らは便所の中からその紙を拾い出し、洗って広げて乾かしていた。あの事件は本当におかしいやら悲しいやら、印象に残った。

11月に入って、「弁当忘れても傘忘れるな」の通り、雨からみぞれ、やがて雪に変わった。でも、登校のとき足袋は懐に入れて、下駄に素足だった。足袋を濡らすと１日中濡れたのをはいていなきゃならないから。学校についてから足袋をはいた。

下駄の鼻緒で深い絆が…

集団登校で神社近くまで来たとき、私の下駄の鼻緒が切れてしまった。雪道をはだしで歩くこともできず、列から離れて途方に暮れていると、近くの家からおばさんが出てきて鼻緒をすげてくださった。嬉しかった。あとでお礼に伺ったが、吉田さんという家で、宇ノ気の方と初めてお付き合いすることになった。休みの日には招かれることもあった。そこで初めて囲炉裏というものを知った。暖かかった。おやつにふかし芋や煎り豆もいただいた。

煎り豆と言えば、ある日、近くの村からおばさんたちが、大八車に煎り豆の入ったかますを積んでやってきて、みんなにお茶碗一杯の煎り豆を配って下さった。いつものおやつはおちょこ一杯の煎り豆だったから、これはありがたかった。布団の中で食べている者もいた。

先生方の要請で、地元の方に芸能を教えてもらうことになり、外日角の方から詩吟を習った。「川中島」「頼山陽」「上杉謙信　九月十三夜陣中の作」など。難しかったが、今も覚えている。女子青年団からは和漢朗詠を教えてもらった。「山は裂け海はあせなむ世なりとも、君にふたごころ我あらめやも」「四方の海みな同胞と思う世に　なで波風のたち騒ぐらむ」「あさみどり澄み渡りたる大空の　広きを己が心ともがな」の三つが特に印象に残っている。わが娘にこの歌の中から名前を付けたほどだ。

「ふる里」は宇ノ気の歌かと

宇野気の教証寺に６年生の女子が来ていて、村の青年団が男子女子まとめてのお話会を開いて下さった。紙芝居の後、素晴らしい合唱があってかたずをのんだ。とりわけ「うさぎ追いしかの山　小鮒釣りしかの川…」の「ふる里」は初めて聞くいい歌で、宇ノ気の歌かと思った。この歌を聞くたびに宇ノ気の山や川、河北潟を思い起こす。

分宿というのがあった。正月を前に、地元の方から疎開児童を慰めようと分宿の申し入れがあった。私は鼻緒でお世話になった吉田平正さん宅の予定だったが、先生の手違いで、吉田本家へ連れていかれた。おかげでその後２軒の吉田家とお付き合いさせていただくことになった。本家は内日角でも屈指の大きな家で織物工場を営んでいた。印象深いのは、そこで正月のしめ飾り用の縄を初めてなったことだ。

昭和20年２月27日、大阪への帰宅命令が出た。雪の降った日、持てるだけの荷物を持って東金沢の駅から列車に乗った。うれしかった。

３月に入ると空襲が始まった。14日には大阪駅がやられ、大阪城近くの操車場もめちゃめちゃになった。ものすごい熱風が来た。焼夷弾はナイヤガラの滝のように火が降った。いよいよ卒業式。夕闇迫る中「海ゆかば」を唱ったところで空襲、すぐ教室へ。卒業証書をもらってさよならを言う間もなく帰宅した。

退避壕で黒焦げの児童たち

大坂は日中も連日空襲に襲われた。校庭には退避の遅れた低学年の児童たちがバタバタと倒れており、退避指導中の中西先生は背中に焼夷弾の直撃を受け、おびただしい血の海の中に内臓を浸し倒れていたという。傍らのくすぶり続けている退避壕の覆いを撥ね退けると、学校で指導された通りの、両手で目と耳を覆う避難姿勢のまま児童たちは黒く焼けただれ、くすぶっていた。鉄兜で汲んできた水を児童たちに注ぐと、遺体はジュージューと音をたてた。学童疎開対象外の低学年の幼い児童たちだった。この日都島は燃え盛り、母校も灰燼に帰した――のちに同窓会で聞いた目撃者の話である。

終戦の前の日にも京橋駅にものすごい空襲があった。学徒動員の生徒たちが集まっているところへ１ﾄﾝ爆弾がいくつか落とされて、駅はめちゃめちゃになり、数百人の生徒たち、大人たちの肉片が壁などに飛び散って即死した。もっと悲惨だったのは何百人もが土にうずもれて首だけ出し、「助け出して！」「水を！」と叫んでいた。炎天下、掘る道具もない。手で掘ろうとしてもとても無理。最

後は水を汲んできて飲ますのが精いっぱいだった。大阪最後の大空襲だったという。

意外！軍港・横須賀に空襲なし

そのころ海軍にいた父は南方で負傷して、横須賀に帰還していた。家族みんな横須賀へ来いという連絡があり、引っ越すことにしたが、周りから横須賀は軍港だから危険だと反対された。どうせ死ぬなら家族そろっている方が、ということで３月21日に横須賀へ向かった。着いてみると全然空襲はない。あとでわかったことだが、アメリカ軍は日本占領後に横須賀を利用するために温存したのだった。金沢や京都、奈良などの文化都市もそうだったのだろう。

隣の川崎市が空襲にあったとき、煙を吐いて飛行機が飛んできた。敵機が撃墜されたと思って見上げていたら、翼に日の丸がついている。相模湾の方へ飛んでいき海へ落ちた。後で父に聞くと、私の予科練の先輩で我が家にもよく来ていた木村兵曹だったという。市街地に落ちると大きな被害になるためそれを避け、ゼロ戦を必死に海まで飛ばして戦死したのだ。

私たちが奥山で防空壕を掘る作業をしていると、遠くにいる水兵から作業員に手旗信号を送ってきた。「日本破れたり」の知らせだった。「１億玉砕じゃなかったのか」と大騒ぎとなった。やがて事実とわかり、作業場から一目散に我が家へ走り帰った。

やがて、８月の末にアメリカ軍の第一陣が上陸してきた。トルーマン大統領は横須賀を壊して帰ってこいと言い、マッカーサーは「横須賀は東京に近く、いい軍港だ。たくさんの機能がある。水も労働力も電力もある。日本が自ら破壊する前に抑えろ」ということで、相模湾と東京湾から敵前上陸してきた。

そこから横須賀市民の悲劇が始まった。配給が止まって食べるものがなくなった。ノビルやタンポポ、ミツバ、海草、テングサなど食べ尽くし、神奈川県の花であるヤマユリも山からなくなってしまった。２日間水だけで何も食べないこともあった。

米軍の残飯配給で命つなぐ

婦人会が立ち上がり、進駐軍に「食べ物をください」と陳情した。最初は断られたが、「残飯でも」という声に進駐軍も折れてくれ、基地や軍艦で出た残飯を週に一度、ドラム缶５、６本に入れてトラックで持ってきてくれた。コーヒー色の汁の中にパンの耳、ベーコンのカス、コーン、中にはたばこの吸い殻やスリッパまで入っていた。それらをより分けて捨てながら、柄杓で１杯ずつバケツに配給してもらった。それにお湯を入れて温めて、１週間の食事にした。そんなひどい時期が１か月ほど続いた。やがて進駐軍の司令部が、「横須賀市民が可哀想だ」として、兵隊が戦場にもっていく野戦用の食糧を分けてくれた。これで初めてチーズやドーナツを食べることができた。

危うく「日本分割統治」に

忘れてならないのは講和条約だ。全面的講和か単独講和か。全面的講和はソビエトも含めての講和、単独講和はソビエトを外したもので、吉田首相が主張した。全面講和には落とし穴があった。ソビエトが日本をドイツのように分割統治しようとしたもので、北海道はソビエト、本州はアメリカ、四国、九州はイギリス、中国にという案だった。これに対してスリランカ（今のセイロン）代表が発言、「日本は分割しないでほしい。私たちは大東亜共栄圏だった」と。これにアジアの国みんなが賛成してくれた。これでソビエトの言う分割はなくなった。日本は戦後、最初にスリランカと外交交渉を持った。これは忘れちゃいけない。

日本は幸か不幸か戦いに負けて辛い思いをしたが、温故知新、もう一度振り返って、こんなことはやっちゃいけないということを伝えていかなくちゃいけない。今は言いたいことが言える世の中だ。昔は大政翼賛会と言って、国の言う通り、国家総動員だった。今は違う。こうしたことを次の世代に話してやってほしい。そしてまた次の世代にバトンタッチしていきたい。

（横須賀市在住）

「反骨の士鶴彬」に感動

講演の野村さん、即生寺へ礼状

過日頂戴いたしました「鶴彬　こころの軌跡」拝見致しました。感動の薄れぬ内にお礼と感想を申し述べたく、筆をとりました。

先ず**「反骨の士高松に見たり鶴彬」**　捷

改めて高松の風土を再認識し、この作品の作成に参加された即生寺の文字を冒頭に見た時、松尾様はじめ檀家の皆様の熱い心意気を感じました。鶴彬　改めてその生涯の信念の強さを感じました。

「かく在りと留めし生きざま鶴彬」　捷

私は川柳はあまり作った事はありませんでしたが、鶴彬氏の鮮烈に心を抉る句は、とて

も感動的でした。当時の国策のもとで父も特高の一人として、どんな動きをしていたのかとても不安になりました。しかし私にとっては尊敬する父でもあったし、仏門に縁もあった父なので…と心は乱れます。

神山監督のお話、昭和七年生まれの私はまさに皇民教育をしっかり受けた世代。今更あれこれ自虐しても始まりません。それで、私達の為すべき事は講演の際にも述べさせて頂いた通り、その事実をしっかり述べ、次世代への反省資料に供するのが責務と思います。

「戦争の声なき声をぞ止どめなむ」　捷

大事な私達の孫子の世代。一部の将校達の駒として戦場に送られ、「死ね」と命じられ、反抗の出来ない世の中を作ってはいけません。鶴彬の説く差別された一部のブルジョアだけが潤い、格差社会で痛めつけられた層が犠牲の先端とされる様な日本を作ってはいけません。取り急ぎ興奮醒めぬ内の感想迄。お元気で。

「もの言える世間が平和を礎（いし）づくる」　捷

「南京事件　兵士たちの遺言」
碑前祭で上映会

鶴彬が「川柳人」弾圧事件をうけて逮捕されたのは昭和12年12月初旬。ちょうど同じ時期、日本陸軍は中華民国の首都南京を陥落させた。そこで日本軍の兵士たちは何をし、何をさせられたのか。旧日本兵たちの日記や証言、また現地南京での取材により南京事件（南京大虐殺）の真相が浮き彫りになる。

この番組は日本テレビ系のＮＮＮドキュメントで昨年の10月４日の深夜、ＢＳフジで放送され反響を呼び、平成28年第53回ギャラクシー賞テレビ部門優秀賞に選ばれた。

９月14日の碑前祭の後、南町会館で上映します（無料）。

鶴彬資料館＋内灘・風と砂の館
セット見学相次ぐ

鶴彬資料館やその近くにある３つの鶴彬句碑の見学に訪れる団体が相次ぎ、４月には３団体の来訪がありました。その後、６月４日には福井県国賠同盟を中心にした28人の皆さんがバス１台を仕立てて訪れました。一行は句碑巡りをした後、隣町、内灘の「風と砂の館」へ向かいました。

内灘基地闘争の記念館で、鶴彬資料館とは情報交流の関係にあり、最近、両館をセットにした見学者が増えています。この後も団体見学の予約が数件はいっています。

■発　　行
鶴彬を顕彰する会
■事 務 局
〒929-1215
石川県かほく市高松キ５
■ＴＥＬ／ＦＡＸ
076－281－1201
■E-mail
turuakira@yahoo,co.jp
■ホームページ
http://tsuruakira.jp
▼年 会 費
2,000円（団体3,000円）
▼「はばたき」購読料
1,000円（年間）

原爆パネル展　8月13日（土）～17日（水）　AM10時～PM5時

全戦没者追弔法会　8月15日（月）　AM11時　法話：平野　喜之
「勿忘（わすれな）の鐘」　戦争を忘れないように、平和を願って、皆さんと鐘をつきます。

いわさき ちひろ展　8月18日（木）～21日（日）　AM10時～PM5時
「ちひろのメッセージに学ぶ」　平野　道雄　8月20日（土）　PM4時

増田　康記（平和と生命と自然のうた）**コンサート**

生きることを学ぶ会　8月31日（水）　PM7時30分　講師：瓜生　崇氏
講題「カルト問題を学び、カルト問題に学ぶ」

かほく市高松　浄 専 寺（電話　076－281－0546）